

垂水南遺跡発堀調査概報

大阪府吹田市垂水町

1977年 3月

吹田市教育委員会

序

文化財は、わが国の歴史や文化を正しく理解するとともに、将来にわたる文化発展の基礎をなす国民的遺産といわれています。

しかしながら現実には、急激な都市開発によって多くの貴重な文化財が破壊を余儀なくされてしまいました。

今回調査した垂水南遺跡は、昭和45年に完了した南吹田第2土地区画整理事業によって弥生期を中心とする多数の土器が出土し、その存在が明らかにされました。

その後、本格的な調査が実施されることなく急速に市街化が進められることによって、遺跡に与える影響が危惧されてきました。

そこで本年、建設工事等による破壊から遺跡を保護するとともに、その性格を解明するため、発掘調査を実施し、後述するごとく、本遺跡が弥生中期から奈良時代にわたる長期かつ大規模な生活の場であることが判明しました。

しかし、本年度は限られた区域での調査であり、その全容を明らかにすることはできませんでしたが、今後継続的な調査を計画するなかで、本遺跡の歴史的な価値の充実とあわせ、郷土の文化遺産の保存と活用に努める所存です。

おわりに、調査の実施にあたりおよせいただいた土地所有者をはじめ多くの地元関係者の御援助、御協力に対し、深く感謝の意を表する次第です。

昭和52年3月

吹田市教育委員会

教育長 蔡 重彦

凡　　例

1. 本書は、国庫補助による昭和51年度埋蔵文化財緊急調査事業として、吹田市教育委員会が行った、垂水南遺跡の発掘調査の調査概報である。
2. 発掘調査は4次にわたり、以下の4地点に対して行った。調査地点、調査期日は次のとおり。

第1次調査	垂水町1丁目222	S.51.11.10~11.30
第2次調査(C-7地区)	垂水町3丁目22-1	S.51.12.1~12.29
第3次調査(C-4地区)	垂水町3丁目10-3	S.51.12.19~12.28
第4次調査(D-5地区)	垂水町3丁目15-5	S.51.12.23~12.24
3. 発掘調査、資料整理については、常に関西大学考古学研究室学生の応援をうけたが、文学部学生、渡辺昇、米田文孝、福本明、東泰三については、一部本書に執筆を分担した。
4. 本文中の遺物番号は、すべて図版、挿図の番号と統一してある。
5. 挿図の遺物実測図は、土器については1:4にて統一してあるが、特殊なものについては統一していない。また、巻末図版写真については特に縮尺を記載していない。

目　　次

第1章 調査の契機	1
第2章 位置と環境	3
第3章 丘陵部の調査(第1次調査)	6
第4章 平地部の調査(第2・3・4次調査)	15
第5章 総括	34

第1章 調査の契機

垂水南遺跡は、大阪府吹田市垂水町一帯に所在する。当地は、標高3m～2.5mの低地で、近年の区画整理事業による計画都市街路の完成と、相次ぐビル建設によって市街化される以前は、一面に条里畦畔を遺す水田地帯であった。

この地の北方、丘陵中腹には式内社垂水神社が鎮座し、背後丘陵の一帯は弥生時代の高地性集落址として著名な垂水遺跡の存在するところである。ところが、この垂水南遺跡は、以前は学界をはじめほとんど知られるところではなく、昭和44年度に大阪府教育委員会より刊行された「大阪府文化財総合分布図」に弥生遺跡として記録されたのが最初であった。

以後、吹田市が刊行した『吹田の文化財(第1集)』、『吹田の文化財(第2集)』には、採集された資料をもとに、弥生～古墳～奈良時代に至る複合低地性集落址として性格づけられた。しかしながら、垂水遺跡に続く、低地遺跡であるとして重要視されながらも、未調査な故に、その記述は詳細に及んだものでもなく、急速な開発に対し、文化財保護の立場から充分な対策がたてられなかったのも事実である。したがって、今年度の発掘調査事業は本遺跡に対する最初の調査事業であり、公に報告されるのも本書が最初である。よって、まずここでは、遺跡の発見から今回の調査に至るまでの経過を簡単に述べ、今回の調査の意義と目的を明確にしたい。

本遺跡が最初に知られたのは、昭和41年9月であった。おりから開始された、南吹田第2土地区画整理事業による下水管敷設に際して、土中より多数の土器、木器が出土しているのが、在地の研究者若村正博氏（現大阪府文化財愛護推進委員）の目に触れたのである。

同氏は同年9月8日付文書でもって、付図3葉、付表1葉を添付して、大阪府教育委員会に通知したが、その内容は実に詳細にわたっている。それによると、出土遺物は弥生式土器、土師器、須恵器、木器等1,842点に及び、なかでも土師器は1,404点をしめ、当遺跡は、丘陵部の垂水遺跡より比較的新しい時期まで集落が継続している「新遺跡」である旨を報告するとともに、出土地点は垂水町3丁目18～23、25～28の広範囲にわたることを明らかにされている。

この詳細な報告が、その当時、どのように評価されたのかは、既に10年以上も経たことでもあり不明であるが、先述したとおり、昭和44年の大阪府文化財総合分布図では弥生遺跡として垂水南遺跡が表記されている。統いて、吹田市教育委員会によって編集された『吹田市文化財地図』には「No.79. 弥生・奈良時代遺跡」として明記されたが、地図上には垂水町3丁目9～20番地にあたる東西300m×南北200mが遺跡範囲として表示され、若村氏報告の直跡南半分、25番地付近は遺跡範囲に含まれていない。これはおそらく編集時の情報不足に起因するものと思われる。

さて、南吹田第2土地区画整理事業は昭和45年度をもって、一応の完成をみ、東西南北に整然と都市街路が完備したもの、当初はまだ多くの水田を残し、旧来の静閑な田園地帯の様相

を充分にのこしていた。しかし昭和45年、日本万国博覧会の開催を機して敷設された地下鉄江坂駅の開設などにより、本地域は北大阪の副都心として注目をあびるようになり、高層ビル、マンションの建設が急ピッチで進み、急速に都市化されるようになった。このような情勢に伴ない、遺跡の破壊が不可避な事態となつたため、昭和51年度の国庫補助による埋蔵文化財緊急調査費を計上し、本遺跡の実態解明へ着手したわけである。

調査の着手に先立って、本格的な分布調査を開始したのであるが、水田面からは充分な採集資料を収集することはできず、調査地点の選定を急いでいたところ、昭和51年6月18日に至り、垂水町3丁目25-13のビル新築工事現場において、多数の土師器、須恵器が出土しているのが確認された。この地点(C-8)については、6月19日から11月10日まで、3回にわたって原因者負担でもって発掘調査が行われ、堅穴式住居址、高床式住居址、土塙などが検出され、多大の成果を得た。この調査は、本遺跡において、遺構の確認された最初の調査であり、從来の土器出土地点とも考え合わせるなら、予想以上の広範囲に遺物、遺構が包蔵されていることを示し、早速な試掘調査の必要性を痛感せしめたわけである。

今回の調査は、11月10日より開始され、12月29日まで、1~4次にわたって行われた。

第1次調査は、垂水町1丁目222番地の丘陵部から開始した。この地点は、垂水遺跡のA地点と呼ばれている丘陵最高部の、西約200mにあたる丘陵南斜面である。この地は東から西にのびる丘陵支尾根であるが、昭和30年代の造成工事によって、その北側が大きく削られ、約10mの急な崖をなし、加うるに、南側は旧地形を残すものの、平均20°の急勾配をなし、風雨による土砂の流出が激しく、かつて数度にわたって山崩れをおこしたこともある。北側の造成工事の際には灰を伴なうおびただしい弥生式土器が出土したと云われ、残された崖面には、現在でも多くの土器、石器が露出、散布し、堅穴式住居址と思われる土器包含層、ピットが断面に露出している個所がある。また昭和49年秋には、斜面の崩部にある垂水町1丁目16番付近より、弥生式土器~瓦器に至るまでの土器包含層が検出された事がある。このようなことから、丘陵頂部の垂水遺跡と平地一帯に所在するとみられる垂水南遺跡の範囲、あるいは、その性格が明らかでなく、丘陵裾の標高5~10mクラスの地点に対しても調査を拡大する必要があった。今回の調査は、丘陵南斜面地形を延長200mにわたって測量調査を行ない、現時点での地形を記録に止めるとともに、斜面の各所に計10箇所のトレンチを設定して発掘を行ない、遺物の包含状況を記録に止めた。

第2次調査は、昭和51年12月1日~12月29日まで、垂水町3丁目22-1において行なわれた。当該地点は先に古墳時代住居址、土塙群等を検出した個所の北東約50mにあたり、これらの遺構群が北方へ展開していると想定されたため、将来に予定されている土木工事に対処するために調査したものである。

第3次調査は昭和51年12月19日から12月28日まで、垂水町3丁目10-3に対しても行われた。

本地点は、倉庫の建設工事の着工が予定されていたところで、トレンチを設定し、包蔵状況を確認した。

第4次調査は、昭和51年12月23日～12月24日の両日にかけて、垂水町3丁目15-5に対して行われた。本地点は昭和52年初頭に土木工事が予定されている所で、2m×3mのグリッドを2個所設定し、遺跡の有無を確認した。

発掘調査は、吹田市教育委員会社会教育指導員藤原 学が担当し、調査員として、大阪府文化財愛護推進委員鎌島敏也がこれに参加し、調査の指導にあたった。また、関西大学考古学研究室からは調査補助員の派遣等の多きにわたる協力、助言を得た。また遺跡発見者である若村正博氏からは調査中にも多くの情報や助言を受けたほか、宗教法人垂水神社、株式会社ヤマト、㈱関西ハウジングサービス、木村修治、中田雪路の諸氏からは調査に際して、快諾を受けた。

ここに、無事に事業を遂行することができた事を記して、深く謝意を表する。

第2章 位置と環境

垂水南遺跡は、吹田市垂水町3丁目の標高3～2.5mの低地を中心とする。区画整理前は、吹田市大字垂水に属し、小字としては、「大半田」、「内ノ六」、「六ノ坪」があり、遺跡東端では「楠脇」がある。現在の垂水町は、昭和15年、吹田市制の施行の際、吹田町はじめ4ヶ町村と合併して、吹田市に含まれたもので、旧郡名では豊能郡に属しており、島下郡との境界、豊能郡の東端に位置する。

本遺跡の北約500mには、地元では垂水の森と呼ばれる標高50m余の丘陵に達する。これが南大阪の泉北丘陵と対比される千里丘陵で、この地点がちょうど同丘陵の最南端にあたる。

千里丘陵は、前期洪積層を主体とする隆起地形で、豈中市側が高く、東方吹田市側が低い。吹田市にあっては、垂水・江坂地区が最も高く、遺跡の北方1.2kmにある三角点（標高83m）が最高所である。この最高所からは、四方へと丘陵がのびるが、そのうち最も南へ走る支丘陵が丘陵南端で大きく西へくねり、この尾根上に発生中～後期の高地性集落である垂水遺跡が展開する。

垂水南遺跡からの景観より、容易に感知できることであるが、この丘陵南面は、千里丘陵の中でもことさら急斜面をなしている。そしてこれは、地形図上では、江坂～垂水～出口町に至るまで弓状に連続した線としてとらえることができる。これは、先に述べたように、丘陵の標高が高い点と、粘土・砂疊を主体となす軟弱な洪積丘陵が地形的に南（あるいは南西）からの浸食を正面から最も強く受けたためと理解でき、垂水神社西側では洪積層が断崖を成しているところもある。

洪積丘陵は軟弱な故に、雨水による開析が進み、丘陵周縁に向けて複雑な開析谷を形成する。この開析谷は、ことごとく水田開発が進み、丘陵斜面は竹林、あるいは千里山周辺では、桃林

等の果樹園となり、近郊農業地帯として高度な土地利用を呈するのである。

集落は、丘陵内では、湧水帶に発生する少數の自然発生集落のほか、新田開発集落もみられるが、大半は、丘陵縁辺部、あるいは、沖積平野部にみられる。

当地周辺の沖積平野は西流する神崎川（旧三国川）と千里丘陵にはさまれた低湿な平地であるが、この沖積平野上には、東方の吹田砂堆上に立地する（旧）吹田村を除くと、東からは垂水・江坂・藏人・小曾根等が展開する。原史・古代以来、当地の生産の主力はこの水田地帯で行なわれたのであろうが、先述したとおり、丘陵と平地との比高差が大きく、丘陵から排出される雨水の処理が当地の生産力維持の最大課題であるはずである。

すなわち、天井川化した糸田川・高川・天竺川がそれで、南を流れる三国川と共に、これら大小河川の治水問題が当地の地理・歴史の中に大きく根付いており、当地にのこる、垂水の高権伝説、あるいは雉子巣伝説がそれを雄弁に物語っている。とにかく、この地は水と関連の深いところなのである。

さて、次に、考古学的成果によって、当地周辺の状況を素描してみる。猪名川左岸地域で、猪名川川床・蘿川川床・あるいは豊中市上野などに縄文晚期遺跡がみられるが、人々の大きな活動の痕跡をみることのできるのは、やはり弥生時代に入ってからである。

平地部では尼崎市田能・豊中市勝部の両遺跡で代表されるような低地の集落遺跡が著名であるが、さらに東方、この猪名川と神崎川に囲まれた平野部には、豊中市利倉・上津島河床、上津島、島田、穂積、小曾根と、ほとんど肩を接するように弥生遺跡が展開し、丘陵縁辺部では、原田（銅鐸）、曾根、長興寺等があり、西摂平野でも、最も遺跡群の密な地域の一つを形成している。ところが、吹田市域に入ると、考古学的調査の後進性もあってか、遺跡は目立って減少し、平地部では、この垂水南遺跡以外では神崎川右岸の南吹田五反島遺跡、さらに対岸の大坂市十八条町所在遺跡、さらに東方では吹田砂堆上の立地である吹田市内本町都呂須遺跡などが、未調査ながら確認されているにすぎない。ただ、丘陵部には、千里丘陵でも最大級の規模をもつとみられる垂水遺跡があり、高地性集落として、当地の中核的な遺跡となる。

古墳時代になると、豊中市では前期初頭の土器の指標となった庄内遺跡が著名であり、また塙・建築構造の検出された利倉遺跡も垂水南遺跡を考える上では注目に値する。弥生中期の大集落で知られる勝部遺跡でも、古墳時代前期の土塙・住居址等が確認されており、これら弥生遺跡のなかでも何らかの形で古墳時代まで継続するものもあるとみられるが、弥生時代ほど実態が把握されていない。

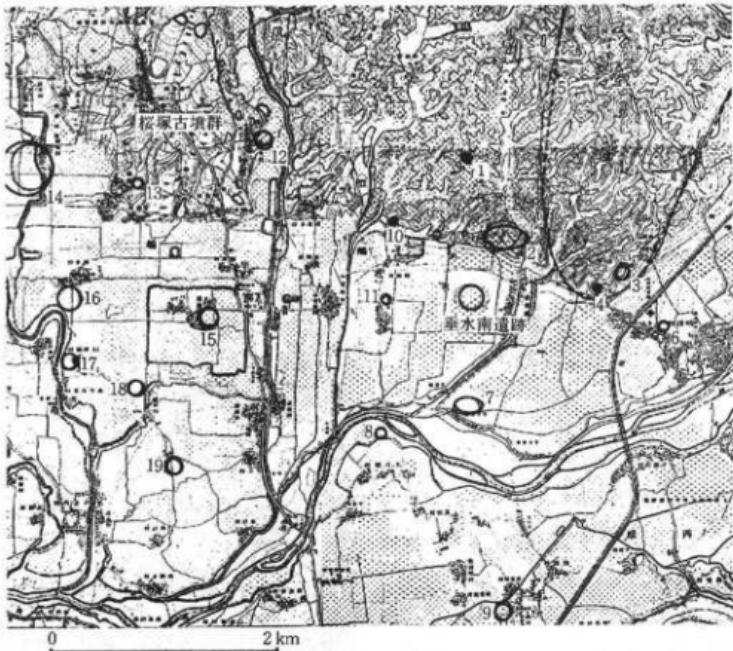
吹田市域に入ると、西方約1kmに藏人遺跡が新たに出現する。詳細な埋蔵状況は不明であるが、布留式期に属する土師器と古式須恵器が出土しており、また奈良時代の黒色土器の出土もあり、垂水南遺跡と距離的にも、また時代様相も近似した形をもつ。

古墳としては、北方千里丘陵中で、発見された垂水西原古墳がある。この古墳は、造成工事後の発見であるため、墳形、内部主体などは知ることができないが、現地に残されていた石材

に、小口部分に赤色顔料の塗付されていたものがあり、竪穴式石室であった可能性が高い。また、その立地からみても前期古墳が想定される。

その他、千里丘陵端の東方1.2kmに出口古墳、北西方1kmに感神宮所在古墳がある。さらに、西方豊中市域には梅鉢古墳、さらに西方は猪名川左岸で代表的な桜塚古墳群が展開する。

このうち、吹田市域に入る出口古墳は6世紀初頭、感神宮所在古墳は7世紀初頭とみられ、垂水南遺跡とは、やや時期的な隔たりがある。位置的にも、本遺跡を眼下に見おろす、垂水西原古墳が、その前期的様相とともに最も注目されるべき古墳であるが、採集された石材のみで



- | | | |
|-------------|-------------|-----------|
| 1. 垂水西原古墳 | 8. 十八条町遺跡 | 15. 穂積遺跡 |
| 2. 垂水遺跡 | 9. 崇禪寺遺跡 | 16. 利倉遺跡 |
| 3. 片山公園遺跡 | 10. 感神宮所在古墳 | 17. 上津島遺跡 |
| 4. 出口古墳 | 11. 藏人遺跡 | 18. 島田遺跡 |
| 5. 千里古窯跡群 | 12. 長興寺遺跡 | 19. 庄内遺跡 |
| 6. 都呂須遺跡 | 13. 原田遺跡 | |
| 7. 南吹田五反島遺跡 | 14. 勝部遺跡 | |

第1図 遺跡分布図

は、正確な位置づけはできまい。いずれにせよ、本遺跡周辺は、西方の豊中市域に比すると古墳の規模、数量ともに著しくおどるのは事実であり、考古学調査の不充分さを考慮してもなお、その稀少性は明らかである。

奈良時代に至ると、豊中市域でみられる廃寺址も高川以東の吹田市域ではみられず、ただ白鳳期に比定される瓦、須恵器が江坂町で出土している。工事中の出土でもあり、寺院址か、瓦窯かの判断はついていない。当地周辺は、寺院址の存在よりも、むしろ、東寺領垂水庄の成立（弘仁3年）、あるいは、古代末には成立していたと思われる春日社領垂水西牧の所在するところとして注目されるように、文献に表わされた農民の生活が大きくクローズアップされているのである。

第3章 丘陵部の調査（第1次調査）

1. 調査の経過

第一次調査は垂水遺跡西方丘陵地域を対象とし、11月10日から本格的に調査を開始した。地形測量に主力を注いだため相当の人員、期間を費した。15日から、順次グリッドを設定し、発掘調査に入り、27日までに調査を終え、29・30日の両日に全グリッドを埋め戻し、全作業を終了した。

2. 測量調査の成果

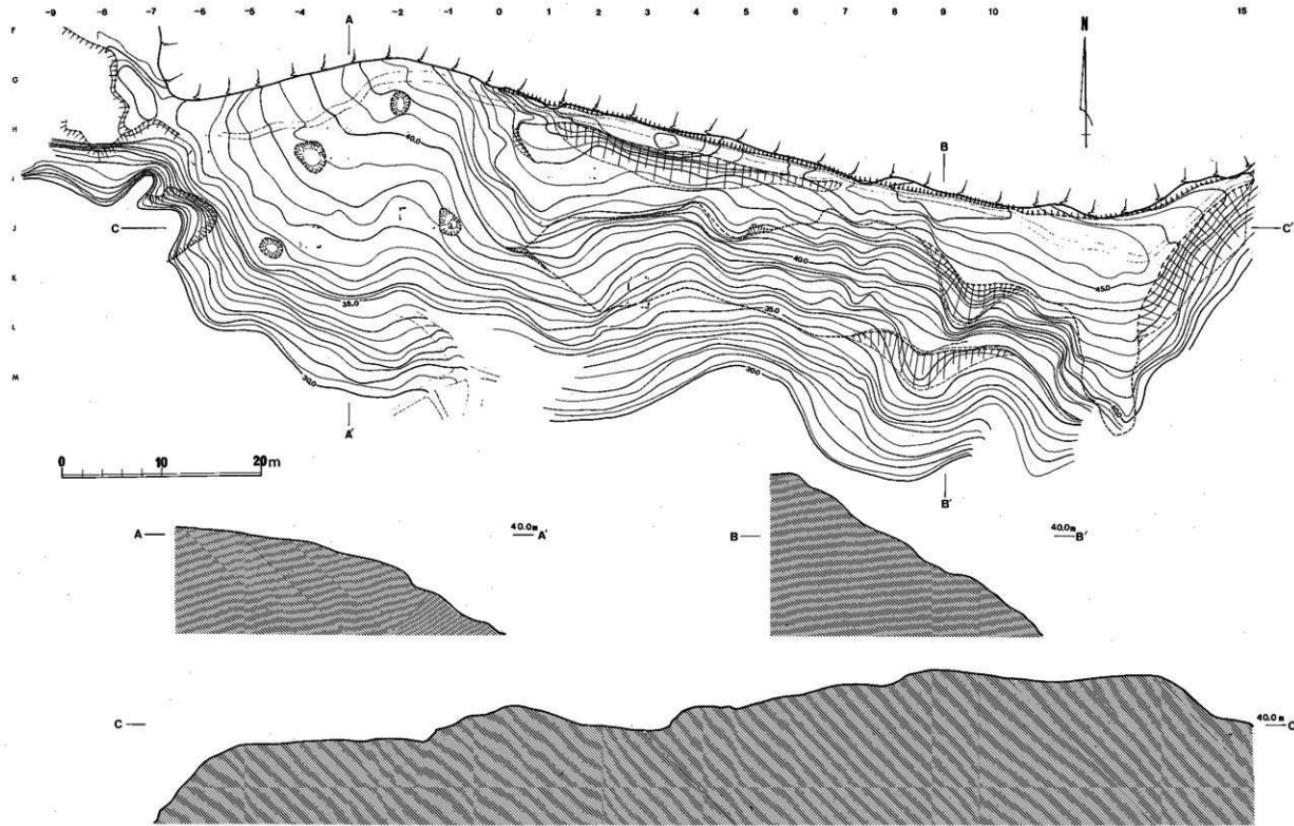
宅地開発によって確認された垂水南遺跡の範囲は明確でない。垂水遺跡の広がりも明らかにし得ない。その有機的関係を把握するために、地形測量図の作図は意味がある。北方の崖や平坦部の窪みも変化が激しく、緊急に測量する必然性がある。それゆえに、長期間を費し、極力低標高、広範囲をめざすことに主眼を置いた。すなわち、垂水遺跡A地区との谷まで固化し、海拔（T.P.）30mまでを目標として測量した。

3. 発掘調査の成果

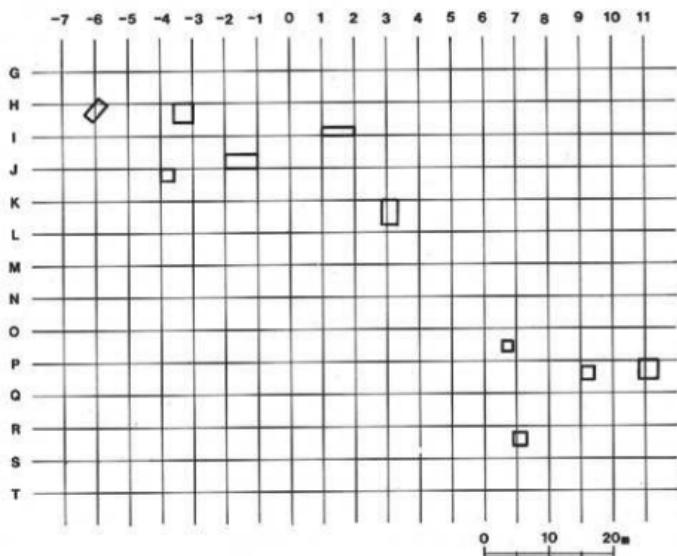
垂水遺跡第一次調査の際に使用した杭を基準とし、それを継続し、補正して使用した。そし



写真1 測量調査風景



第2図 地形測量図



第3図 グリッド・トレント配置図

て、垂水遺跡A地区基点を同じく原点とし、基準軸を求めた。すなわち5×5mの方眼を組み、東西方向を数字で、南北方向をアルファベットで表わし、北西隅の交点を各グリッドの呼称とした。設定したグリッドは図3のとおりである。各地形や包含層追求目的のものはトレントとする。トレントの呼称は広範囲を占める地域の名称を使用した。

丘陵上に立地する弥生遺跡のあり方のように丘陵上の狭小な平坦面・テラス部に半堅穴半平

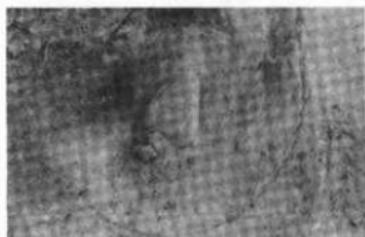


写真2 H-04土塙検出前

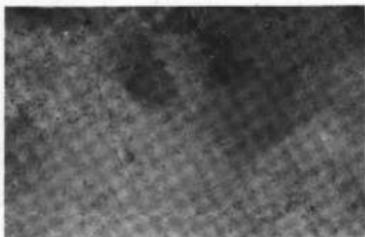


写真3 H-04土塙検出後

地式住居が構えられるなど、遺構存在の可能性を求められるような該当地域にグリッドを設定した。また、地形変換線以下の個所には包含層の二次堆積の有無や遺跡の範囲に含まれるかどうかの問題がある。また、谷地形や鞍部にも二次堆積があることが多々あり、調査の必要が感ぜられる。そのような地形にもグリッド・トレンチを任意に設定した。

その結果、包含層と土塙が確認され、2次堆積のあり方や範囲も、ある程度推定されるようになった。各調査個所で段や、ゆるやかな落込みが認められてたが、H-04の土塙を除いて遺構は検出されず、すべて自然のものと考えられる。

基本層序としては、図5・6のようには5~6層を主としている。黄灰褐色・淡黄灰褐色土層は共通の弥生包含層ではあるが、二次堆積の可能性が強い。地山は白褐色粘土層・赤褐色粘土層・灰色砂層などの洪積層で地形に準じて変化を示している。

遺構と思われるものとして、H-04で土塙を検出した。西壁沿いであったことと、傾斜地山に位置していること、そして、台地の遺跡特有の保存状態の悪さによって明瞭ではないが、墓塚の可能性を考えている。形状は最大径57cmの楕円形を呈する。緩斜面ではあるが、両肩のレベルを同じくし、水平に掘られている。變(24)に被さるように平石が置かれており、埋土に炭を含んでいる。現在、リン分析を武庫川女子大学薬学部安田教授に依頼中である。⁽¹⁾

弥生期の包含層は、H-04のほか、I-02・K-03で確認したが共に二次堆積の可能性が強い。特にI-02は古式土師器と思われる土器を出土し興味深い。

4. 遺物

出土遺物は、土器・石器・古銭が出土している。土器は弥生式土器で、一部は弥生終末期から土師器にかけてのものも含まれる。石器は石鎌と砥石であり、前者には打製と磨製の両者がある。古銭は治平元宝で、1064年に鑄られた北宋銭である。次に個々について簡単に記す。

弥生土器

壺(図6. 1~13)

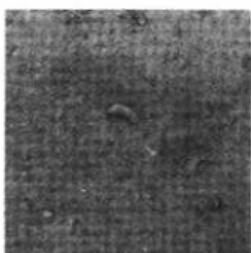


写真4 土製勾玉出土状態



写真5 磨製石鎌出土状態

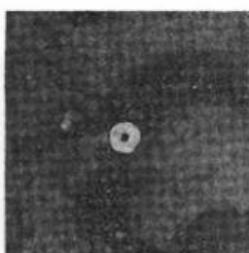
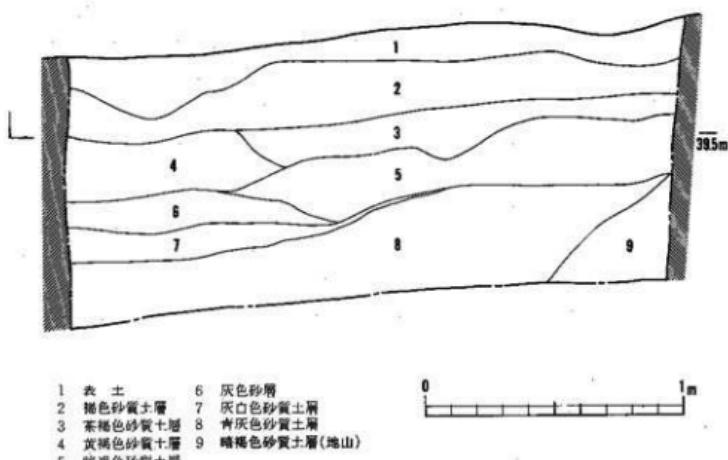
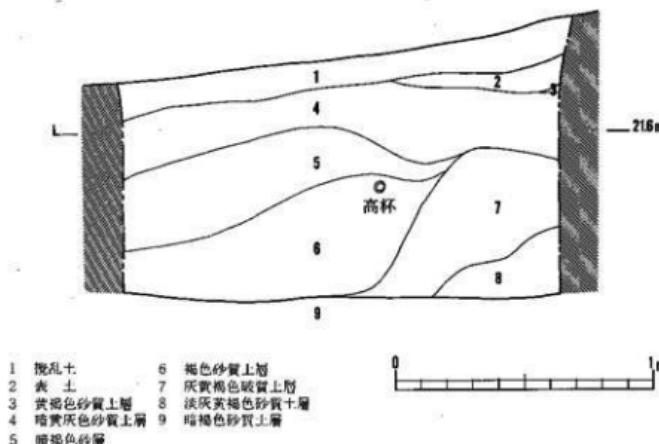


写真6 古銭出土状態



第4図 H-04土層断面図



第5図 R-07土層断面図

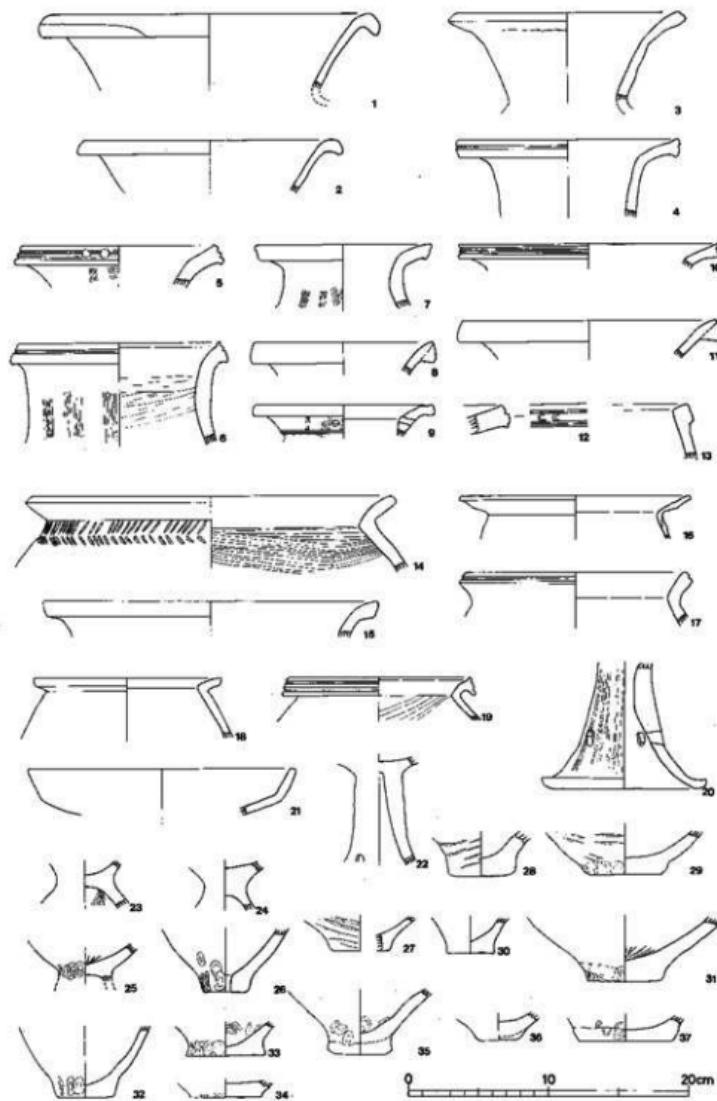
(1)は復原径24.4cmを測り、黒雲母・長石・石英の小石粒を多く含む口縁部である。口唇部は折り曲げただけの簡単な作りで、端面をヘラ状の工具で切り平坦にしようとしている。色調は淡茶褐色を呈しており、胎土と共に河内系土器と推定される。(2)は(1)と同タイプの口縁部で、やはり河内地方からの搬入品と思われ、復原径は19.0cmを測る。表面の磨滅が著しく、整形痕など顕著でない。(3)は口頸部が漏斗状に開くもので、やはり河内系土器である。復原径は17.0cmを測り、(1)と同一層からの出土である。(4)、(5)、(6)、(12)は口唇部に凹縁を有するもので、端部を内外面に拡張させているが、プロポーションは各々異なっている。口径は15cm前後で(1)～(3)に比較して作りも丁寧である。特に(4)は丹を塗っている。(5)の円形浮文（現存部分は浮文が剥離）、(12)の半裁竹管は、整形の細かさなどからやや飾られた土器であろう。(6)は直口する口頸部を持ち、内面をヘラケズリしており様相を変えている。(8)(11)は径こそ違うが同タイプの壺で河内系土器である。一度作りあげた口縁端面外方に粘土を付け足し、肥厚させている。接合面には指頭圧痕らしき形跡を残し、簡素な作りである。(9)は短い頸部で、端部近くで水平に屈曲している。端部は丸く作られ径は13.0cmを測る。頸部に5cmの円孔を有しており二孔一対になったものと思われる。頸部に2条以上のクシ描きの直線文を施し、ヨコナデで整形されており、非常に丁寧な作りである。(13)は無頸壺もしくは大形鉢の口縁部と思われるが、小片のため復原径を求めるのは困難である。茶褐色を呈し、黒雲母の砂粒を含む河内系特有の色調・胎土を示す。

壺（図6 14～19）

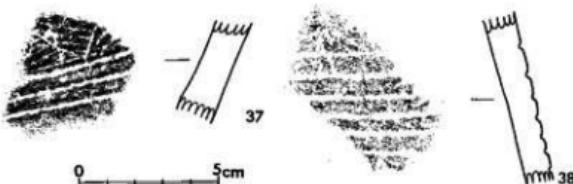
(10)は口径25cmを凌ぐ口縁部で、くの字形に屈曲しており、端部は磨滅しているが角張らせて終えるものだろう。内面は5～6本/cmの粗いハケで整形しており、外面はヨコナデで仕上げている。頸部下に綾杉状にヘラ状工具で施文しているが、上下別々に施したもので対にならない。色調は赤褐色。胎土には石英・チャートの小石粒を少量含む。(14)は、出土土器中では異彩を放っている。丘陵部の土器としては珍しく保存状態が非常に良好で堅く、胎土もチャート・金雲母の砂粒を含むが緻密である。外方に広がった口縁部で、口縁中位で外面に肥厚しており、外面弓状を呈する。頸部下に粘土紐の織目が明瞭に看取できる。頸部下も一ヶ所肥厚させており、全体的に器肉は薄くヨコナデが施されている。器表は黄褐色、器肉は黒灰色のサンディッチ状を呈する。(15)は口縁部から胴部にかけてゆるやかな曲線を描くもので、復原径は15.6cmを測り、1条の凹線を有する。表面磨滅しており整形痕は不明である。胎土は緻密で灰白色を呈する。(16)は短い口縁部で激しく屈曲して外方に広がる胴部につながるもので、最大腹径が口径を凌駆するものである。河内地方の土器で黒雲母などの小石粒を多く含む。脆弱で整形痕不明。(17)は口縁端部を上下方に肥厚させ、端面に2条の凹線文を施し、ヨコナデ調整したものである。鋭く屈曲した短い口縁部となり、頸部で作り分けている。内面は粗いハケで整形され、復原径は13.2cmを測る。

高杯（図6 20～22、24）

(18)はほぼ完存する脚部で幅径11.7cmを測る。透孔に特徴がある。四方透孔ではあるが、不整



第6図 第1次調査出土土器実測図



第7図 文様拓影

形な孔で間隔もまちまちである。透孔はヘラ状のもので穿孔しており、方形に近い形を呈するが、内面にはわずかしか透孔が達していないものもある。鋸部はヨコナデで外面はヘラミガキで整形されている。色調は褐色、胎土には石英・チャート・長石・金雲母の砂粒を含む。

脚台部（図6 23、25）

共に台付鉢の脚台と考えている。④は指整形しており外面に指頭圧痕が見られ、仕上げも指調整している。内面には紋り目のようなものが見える。色調は暗茶褐色。最大径4mmの長石などの小石粒小量と石英・長石の砂粒含む。

底部（図6 26～36）

瓶④以外器種を明確にし難いが、壺（29・31、34～36）、甕（27、28、30、32、33）に分けられる。④は指整形された瓶で底径3.0cm、孔径5mm（上方は8mm）を測る。②はH-04土塙の遺構に伴った甕の底部で、タタキ目成形され、4.2cmの復原底径値を得る。一部に黒斑があり、胎土に白雲母・長石の砂粒を含む。甕は全て底部再成形で、指圧痕の伴っているものが多数である（26、31、34、35）。④はタタキ目を指圧痕で消している。底面に木葉痕のあるもの④も含まれている。

石器（図8）

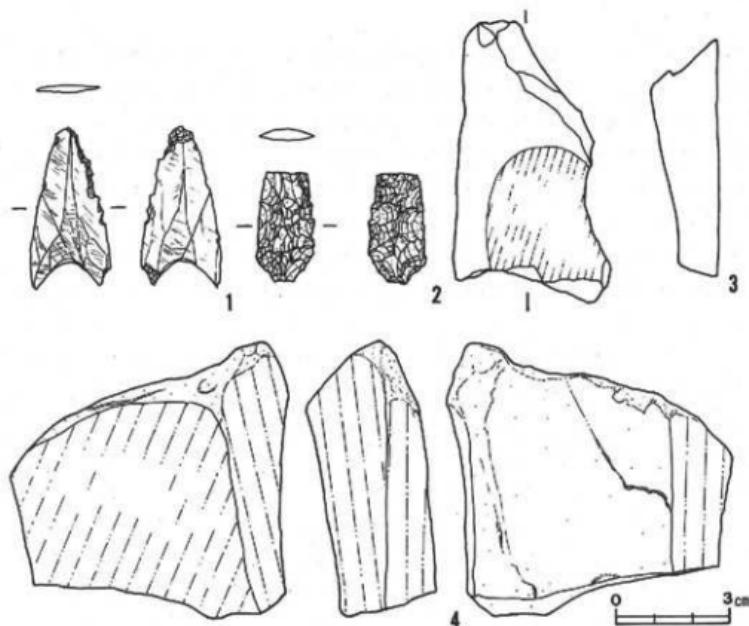
(1)は磨製石鎌で現長4.4cm、幅2.2cm、厚さ0.25cm、現重2.95g、抉り入りとなっている。石材は粘板岩と思われ、右側刃部と先端が著しく刃こぼれしている。(2)は打製石鎌で凸基有茎式である。先端と茎部が欠損しており、現長が3.0cm、幅1.55cm、厚さ3.5cmである。全面が薄く風化しており、二上山系のサヌカイトである。

(3)・(4)は砥石であり、(3)は自然石の表面の凹部を利用して砥面としており、(4)は原材石を割り、それにより生じた剝離面を利用して砥面としており、4面の砥面が認められる。

その他、サヌカイトの剝片が少量出土した。

古銭（図9）

古銭は1点出土している。北床の英宗・治平元年（1064年）に鑄られた治平元宝である。垂水遺跡においても同系統の治平通宝が出土しており、包含層の移動がそれ以降であることが判



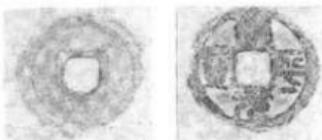
第8図 石器実測図

り、上限が決定できる資料である。字体は篆書体である。

5. 結語

丘陵部において、7グリッド、3トレンチの計10ヶ所の調査の結果、遺構として考えられるのはH-04の土塁だけであった。前述したとおり

土器の遺存状態は悪かったが出土状況などから墓址と考えている。近隣地域において弥生時代の墓制を示すものは、勝部遺跡で代表される木棺墓、田能・加茂・宮の前遺跡の方形周溝墓、会下山・田能・加茂遺跡の土塙墓、上穂積⁽¹⁾・南刀根山⁽²⁾・加茂⁽³⁾・田能⁽⁴⁾遺跡の壺棺墓、田能・勝部⁽⁵⁾の壺棺墓がある。今回調査した資料は壺棺墓と考えられる。勝部例は単独で出土し、溝の外に位置し墓域と隔離されており特殊な墓域を形成していたと考えられているが、田能9号墓はやや



第9図 治平元宝拓影

離れてはいるものの同一墓域内と考えられ、特殊性は指摘できない。両者とも中期中葉～後半で時期的には一致しない。次に石を伴う例としては、田能20号墓が骨片と共に壺棺に、会下山M地区3号土塙が土器群と共に伴出している。会下山例は東方尾根の中腹に位置し、すぐ上方にL住居址が位置するが低標高に位置し、下方には遺構は存在しなかった。時期的・位置的に見ると本遺跡例と類似し、丘陵部の遺跡という点でも合致する。ただ規模は長径3m余あり、はるかに大きいものである。

その他、石に関する遺構として会下山F・S・L住居⁽¹⁾や手小屋山1号遺構、名古山住居址⁽²⁾、五ヶ山1号住居址⁽³⁾などに見られる石器以外の自然石の置き置があり、その種の可能性も考慮すべきであろう。

H-07、I-02、K-03で包含層が認められたが、K-03で出土した治平元宝で表徴されるように二次堆積であることが明白である。K-03の場合、古錢から1064年という上限が与えられた。しかしながら、それ一点のみで、他は既生土器以外出土していないので断言はできないが、土器の様相からも二次堆積であることは明言できよう。R-07においても湧水線から高杯2点など土器が出土し、遺構の存在は肯定しがたいが包含層が流れていることが伺われる。

次に土器について述べてみたい。時期としては弥生中期中葉を上限とし、俗に古式土師器と呼ばれる時期を下限とする。口縁部を見る限りでは中期のものが多く、(1)(2)(3)のように畿内第Ⅲ様式のものも含まれる。しかしながら、底部においては底部再成形のものが多く、概ね後期に比定されるものである。それらが同一層から出土していることからも、二次堆積であると言えよう。ただ調査資料中、時期が遡るもののは全て河内からの招来品であることは興味をひく。河内系の土器の比率は高く、(1)(2)(3)(4)(5)(6)(7)が河内系である。他地域からの搬入品と思われるものに例がある。小片で全体像は想定しかねるが、器台もしくは壺の一部かと思われる文様構成であり、中部瀬戸内地域の土器を思い出させる。

器種の面から見ると、通有の遺跡のあり方と同じく壺が最も多く、壺が続いている。割合が逆転する前段階なのである。高杯・器台も含まれるが鉢は現時点において見当たらない。

時期的に離れるものとしてI-02の土器がある。図化し得るものは(1)(2)の二点だけである。(1)は大形の壺で激しく屈曲し、鋭い稜線を持つことと文様に特徴がある。文様は一見して山陰地方のノの字文の構成を思い起すが、ゆるやかな屈曲ではなく、施文具に貝を用いる北九州・山陰のものとは胎土と共に異なる。同種文様として時期は異なるが田能遺跡第4調査区鉄型ビット出土の土器がある。

この二点の土器が垂水遺跡D地区の高杯などと共に垂水南遺跡の間隙を埋める資料として注目され、その意義は高いものと思われる。

山陽の影響が考えられる土器もあり、今後、淀川水系を眼前に望む本遺跡の立場を検討せねばならないであろう。

第4章 平地部の調査(第2・3・4次調査)

1. 調査の経過

第2次調査は昭和51年12月1日から始めた。現状の地形測量ののち、12月3,4日の両日、機械力にて、地表下1.5mの面まで掘り下げ、以下を人力による掘削を行った。

調査区は4m×4mの坪を計5個所とし、南東隅から時計回りに順次、I G～5 Gと呼称した。2 Gの東南隅から3 G、4 Gに至るまで、中世期の粘土層下に、白色砂層が検出され、砂礫・粘土が互層となって、西から東へと流れおり、この状況から河道と判断されたため、河の方向と護岸設備の状況を調査するため、3 Gの北方、さらに2 Gの北方へとトレンチをのばし、これを各々第I・IIトレンチと呼称した。各グリッドにおいては、平面精査に重点をおき、遺物の検出を続けたが、明確な遺構、あるいはC-8地区で検出したような明確な遺構面の検出はなく、1 G・4 G・5 Gにおいて土師器、須恵器、木製品、木材、原材料などを多數検出した。遺物出土状況を記録にとり、土層図作成のち、一部分を深掘し、12月29日埋戻しを行った。

第3次調査は12月19日～28日まで、第2次調査に平行して行った。3m×2mのグリッドを設定したが、この調査で、第3層の中世期相当層から溝状遺構、杭列を検出した。これは本遺跡での最初の中世期の遺構の検出である。以下、奈良時代砂泥り土層から須恵器、土師器、曲物の底板等木製品、木片を検出したが、これも明確な遺構に伴ったものではない。さらに下層ではトレンチ北端より人為的な木組みが検出され、古墳時代の壙とみられた。

土木工事による遺構への影響がないことを確認したので一部遺物を検出したのち、埋戻した。第4次調査は12月23日に着手した。垂水町3丁目15-5の土木工事予定地点に対する試掘調査で、2m×2mの坪掘りを2個所設定した。地表下2.5mまで掘り下げたが、湧水が激しく、土層壁の崩壊により、調査の継続が困難であったため、土層断面の作図、写真撮影ののち、翌24日には埋戻しを行った。出土遺物は木片1点を除いて無く、とくに土器類の出土はみられなかった。また遺構の検出もなかった。

なお、区画整理完了地域については、今後の継続した調査が予想されるため、区画整理街路によって区分し、第10図のごとく、地区名を付した。すなわち、府道豊中一吹田線以南の区画を北から順次1,2,3…とし、豊津第1小学校以東を西から順次A,B,C,…とし、各々その交点の符合を地区名とした。すなわち、第2次調査区はC-7地区、第3次調査区はC-4地区、第4次調査区はD-5地区である。

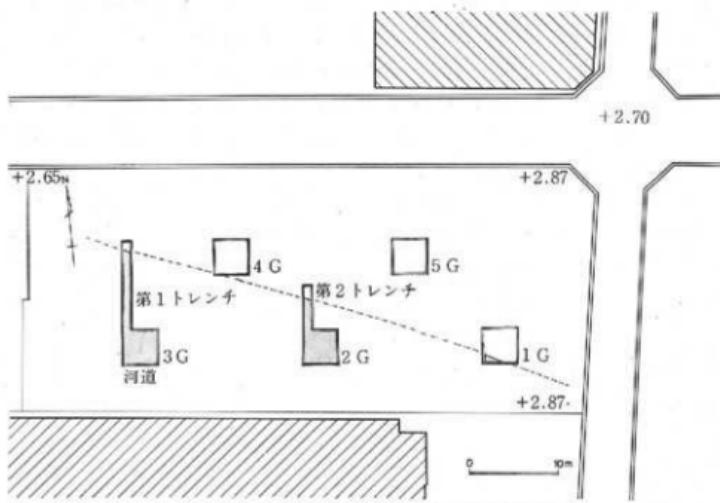
2. C-7地区の調査(第2次調査)

五個所の坪掘りの結果、河道と思われるものを除いて、遺構の検出はなかったが、遺物の出土状態の記録、及び土層断面観察により、調査を進めた。以下 1 G～5 G、第I、IIトレンチの所見を抄述する。

1 G 現地表(海拔2.8m)より約1mは近年の盛土層で、他からもち込まれたものであ



第10図 発堀調査区と地区名一覧

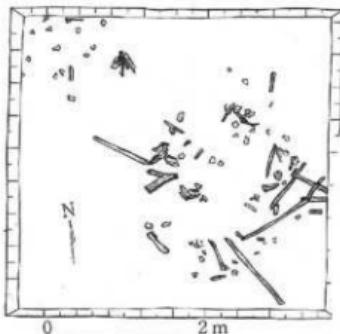


第11図 C-7地区グリッド・トレンチ配置図

る。この下層に旧水田面である約20cmの黒色土層があり、その下層は、茶褐色砂層（厚さ、0.1m）、さらには、鉄錆混りの灰色粘土層（0.2m）、茶褐色粘土層（0.2m）へと、きわめて整然とした層位を示す。これらの層位は、1～5G、各トレンチにおいて全く同じ様相を示し、安定したものである。

これらのうち、旧水田面の黒色土層以下を、I、II、III、IV層とする。次いで、茶黒色粘土層と灰茶褐色砂質土が、その下層の黄灰色砂層、砂混り黒色粘質土を西から覆い込むようにして堆積している。この層以下はまた安定した土層位になり、茶灰色粘土（0.3m）、青灰色砂層となる。1Gにおいては、東北限にやや異った層位を示し、IV層下でみられた茶黒色粘土層下に、安定した青灰色粘土層が部分的にあらわれる。この粘土層はC-8区で行われた調査では住居址、土坑の埋込まれた層位に相当し、今後の調査で重視されなければならない層位である。

河道内堆積土とみられる砂混り黒色粘土は、1Gの南西限のみにみられ、他は、灰色粘土～



第12図 1G 1・2次面出土状況

茶褐色粘土を主体とする。この陶粘土層は、4G、5Gでみられた、VI、VII、VIII層に相当すると思われる。この粘土層直上にて、奈良時代土師器皿を一点出土する他は、古墳時代土師器、須恵器が細片を主体としながら、多くの木片を伴って出土する。出土するレベル差は約30cmもあり、上層より第一次面、第二次面として遺物を検出したが、二次面においてなお須恵器(102)を伴なう。また、下層に至るほど良好な資料が出土した。部分的に深掘を行ないIX層の青灰色砂層を確認した。(第3次面)

2G IV層下に白色砂層と黒色粘土層とが互層をなす河道内堆積土が全面において検出された。したがって2Gは河道内を掘ったわけである。砂層の砂流は、北西より南東へ向い、河の流れを示している。本グリッドにおいては、河底まで2~3m掘り下げた。なお、河道の範囲確認のため北へむかってトレンチを設定した。(第IIトレンチ)。

出土遺物は、河道内であったためか、きわめて少なく、砂層より土師器細片、木片が若干出土したのみである。

3G 2Gと同様、河道内にあったため、IV層以下は白色砂層が主体をなす。ただ白色砂層最下部に厚さ約20cmの黒色粘土層があり、河床をなしていることが確認された。河道の方向を検証するために、北側へトレンチを延長した。(第Iトレンチ)

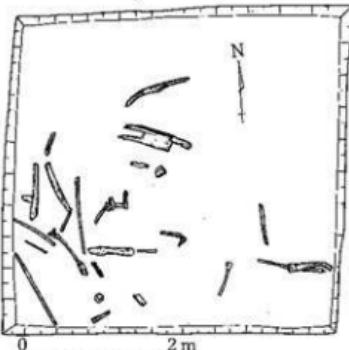
出土遺物は2Gと同様少なく、土師器細片、加工木片などであるが、注目すべきものとして浮子とみられる双孔木製品が一点出土している。また河底の黒灰色粘土中から白鳳期の平瓦片

が出土しており、河道の時期的な把握に大きな根拠を得た。

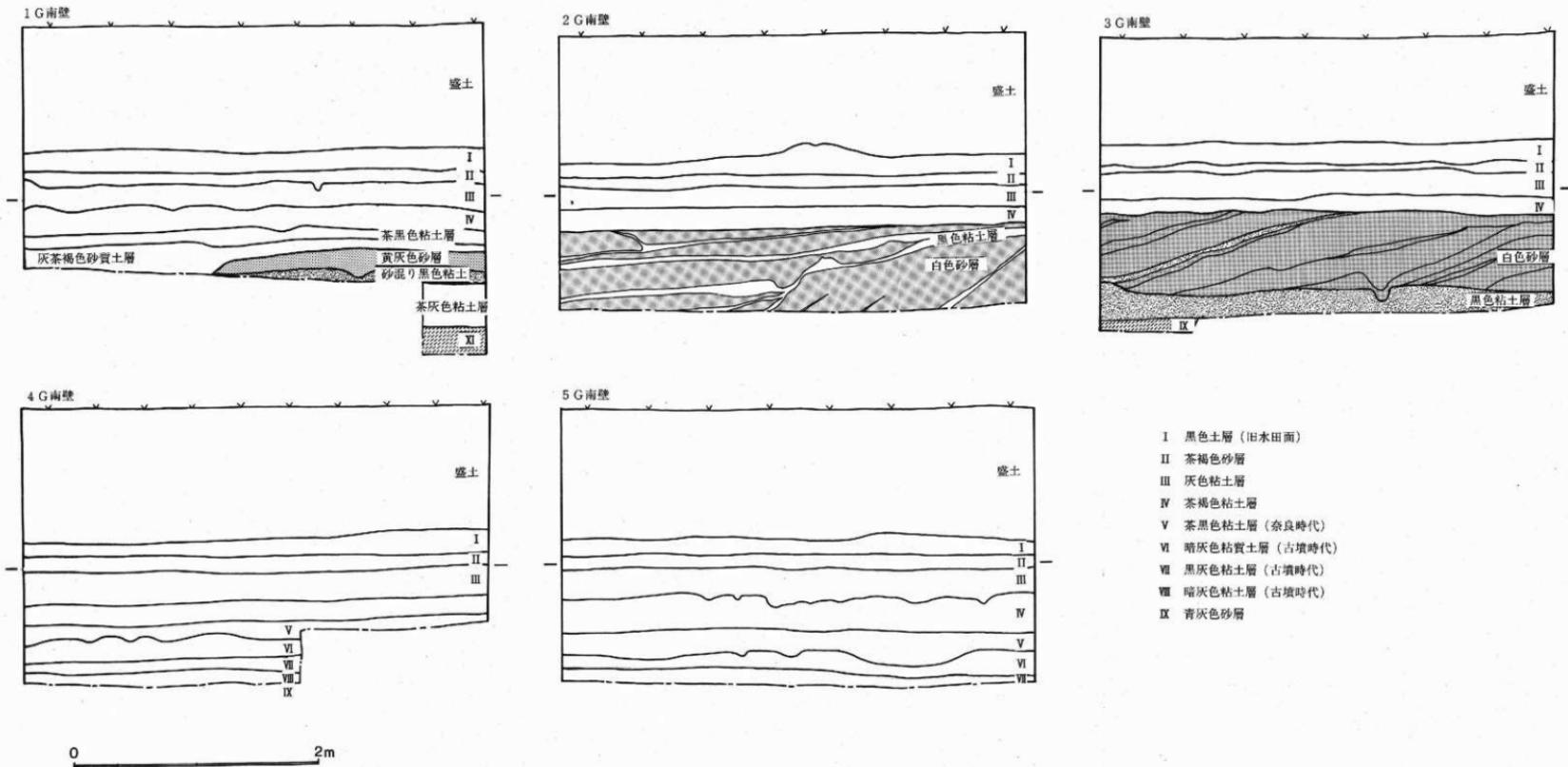
4G 4Gは、1、2、3Gのような河道の影響をうけず、各層とも、安定して堆積を示し当地におけるきわめて自然な層位を呈している。VI層以下は、砂を混える茶黒色粘土層(約1.5cm)、暗灰色粘土層(2.0cm)、黒灰色粘土層(1.0cm)、暗灰色粘土層(2.0~3.0cm)となり、これらを順次V層、VI層、VII層、VIII層とする。1G・5G深掘部分でみられた青灰色砂層は以下の層でIX層に相当する。出土遺物は上



第13図 5G 1次面出土状況



第14図 5G 2次面出土状況



第15図 C-7地区グリッド土層断面図

師器細片と若干の木片のみである。

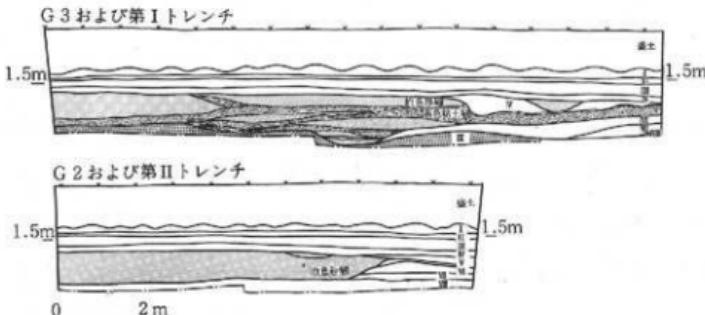
5 G 層位は4 G と全く同一で、I ~ IX層が平順に安定した地積を示す。ただ、VI層において遺物の出土が著しくなり、グリッドの東半分に集中して、土師器では、完形の壺形土器3点ほか、變形土器、高杯などが、須恵器では、古式の甕・杯などが出土している。(第一次面) VII層は、同様な粘土質ながら炭を混え、黒灰色を呈する。出土遺物は土師器のみである。(第2次面) VIII層以下、深堀部分までにも多量の土師器を含み、4 G とはきわめて対称的な様相を呈する。

また第2次面では、特に木製品、木材の出土が目立ち、杭、建築用材などもみられる。

I トレンチ 3 Gにおいては第V層以下、厚さ60cm以上の白色砂を主体とする砂層がみられ、この砂層の堆積状況及び、他のグリッドとの関連からみても、河川跡あるいは、大溝等の水路の痕跡である可能性が高く、その方向、あるいは規模を知る上に、北端を追求すべく3 G の北西隅より北へむかって巾約1.5m、長さ9mのトレンチを設定した。

問題の白色砂層は、随所に黒色粘土と互層をなしながら、最大厚90cmにも達し、やがて、徐々にその厚みを減じてゆく。層の堆積状況は第16図のごとくなり、粘土・砂がレンズ状に堆積するなど、河川 独特の層位をなすが、砂層の状況からして、いずれにせよ、比較的急激な土砂の運搬作用を想定しうる。土層を細分すれば、きりがないが、9層以上に細分され、少くとも、5回以上にわたって激しい土砂流にみまわれたことを示している。土層位をみるとおいては、時代が下るにつれ、河床位が上昇し、当然河道巾が大きくなっていたことがみとめられる。特に第Iトレンチ層においては、トレンチ内に、その北限すら限定することができなかった。おそらく、半ば氾濫状況になっていたのではないだろうかと思える。なお、河床の最底位は、標高+0.32mでありきわめて低位である。

出土遺物は河道中はきわめて少く、木片、土器細片が若干出土したにすぎないが、白鳳期の特徴をもつ平瓦片が第3グリッド内で出土している。またその下層の部分では6世紀後半~末葉とみ



第16図 C-7地区 I・IIトレンチ土層断面図(西壁)

られる須恵器杯（104、105、106）が出土している。

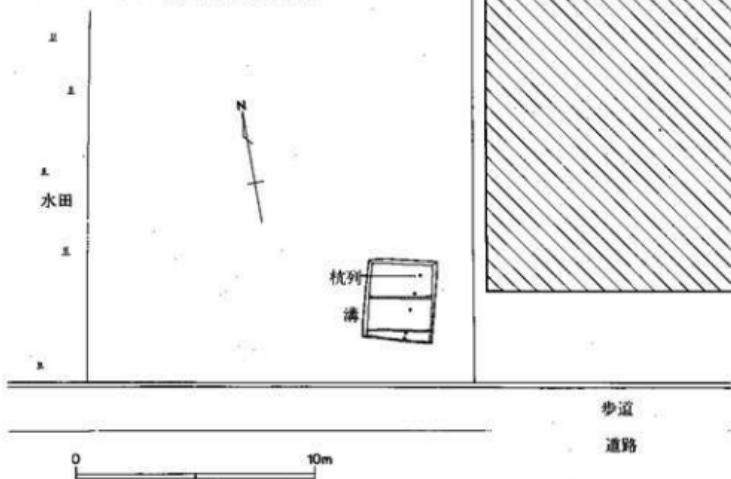
河道内の土砂流の中に堆積していたものなので必ずしもその時期に断定することができないが、層序的に矛盾するものでなく一応の時期的な目安とすべきであろう。また河川内の砂の最上位を流れる茶黒色粘土層は、C-4のみでなく、C-8においてもみられ、明らかに平城期中頃の遺物を含んでおり、本河川の時期を明らかにできる。

第IIトレント Iトレントと同じ目的でもって、第2グリッドの西北限から北へ向って巾1.5m、長さ5mのトレントを設定した。

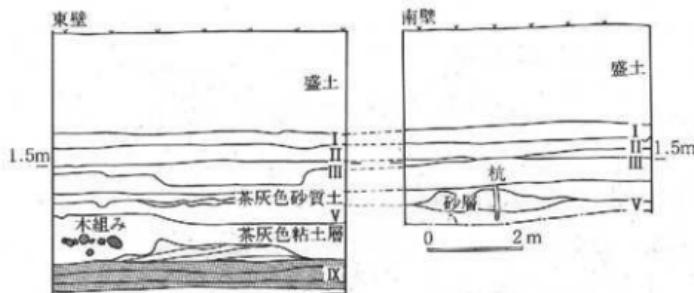
本トレントの白色砂層は、第1トレントのそれとは対称的で、白色砂層自体の流れは複雑であるが砂層と互層をなしていた黑色粘土層はほとんどない。厚さ70cmのこの白色砂は北側へのびるが、G2の北約2mの附近で急に厚さを減じ3m附近でついに消え、砂混りの黒茶色粘土層になる。第IIトレントでは、Iトレントより明白に砂層の北限を認めることができた。

VI、VII層は、4G、5Gで認められた古墳時代の土師器、木器等を包含する粘土層で、この河川がこれら古墳時代の土器包含層を切って流れていることが明白である。黒茶色粘土層は、本河川がほとんど白色砂の堆積によって河川としての機能をはたさなくなつてから以降のもので、第1トレント（茶黒色粘土層）と同じものである。黒茶色の粘土と砂層を混入する層で、この河川の最上部からオーバーフローした形で、1Gで古墳時代粘土層を覆う層である。古墳時代の遺物にさらに奈良時代中頃の須恵器、土師器をともなうことから、この河川の機能が終了した時期が想定できる。

3. C-4地区の調査（第3次調査）



第17図 C-4地区グリッド位置図および中世遺構

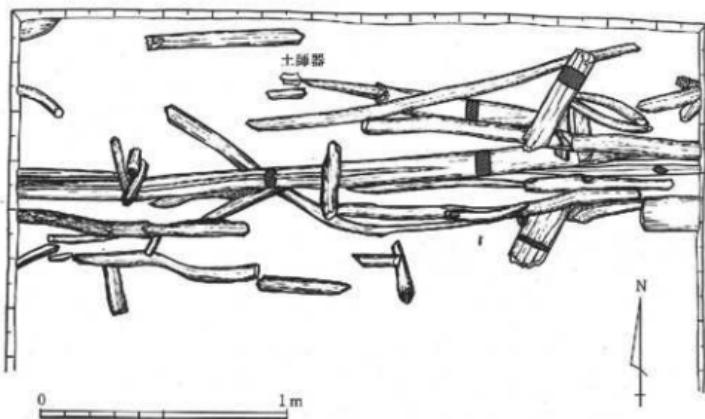


第18図 C-4 地区土層断面図

2 m × 3 m の小グリッドを設定したにすぎなかつたが、C-7 地区では検出できなかつた遺構を検出した。土層図18をみると、盛土下の旧水田面(1層)から、III層に至るまでは基本的に他と変化はないが、III層が色調の変化はないながら、砂質土層と粘土層に2分され、粘土層に浅いながらも溝状遺構を検出した。C-7 地区でみられたIV層は本地区では認められなかつた。さらに下層では杭列を検出し、さらに下層はV層に相当する砂混り黒灰色土層に至る。この砂混り層の下は、平坦な茶灰色粘土層で、ほとんど遺物を含まない。約25cmのこの粘土層を掘り下げるとき大きな木片が検出されたため、グリッド内全域を精査すると、グリッド北半から東西に木組みを検出するに至つた。

次に、各遺構を述べると灰色粘土層を掘り込んだ溝状遺構は、巾1.9 m、深さ10~15 cmで溝の状態からみて、大半がすでに削平され、溝底部分のみが遺存していたと判断できる。溝の方位は、N-10°Eである。水流の方向は狭い範囲の調査でもあり、明言できない。溝の検出に伴つて、瓦器細片を若干検出しておらず、一応の時期判断の根拠となろう。

杭列は、溝状遺構下の茶灰色砂質土層に打込まれたもので、N-25°Eの方向に5本検出された。各杭の間隔は、各々25, 100, 70, 80cmの間隔であり必ずしも規則的に打込まれたものではない。杭は、原木の一方を鋭く加工したものである。打込まれた時期は層位的にも、奈良時代中期より以後、鎌倉期以前のものといえる。この下層、部分的に白色砂層を混える黒灰色粘土層は、奈良時代中期の須恵器、土師器が比較的密に検出された。須恵器は杯や自然釉が釉着した横瓶が、土師器としては皿形土器がある。木製品としては、加工木片、原材の他、曲物の底板とみられる円形板が出土している。木組みはさらに下層、標高0.74~0.5 mにかけて、ほぼN-100°Eの方位に巾約0.8 mにわたって組まれていた。木組みの長さはグリッドが小さく不明である。調査の状況からみて、材の若干の移動、散逸があるが、横桟を杭、縦桟で受けける構造の木組みである。木組みが土木工事によって破壊されないことが明らかとなつたため、深層に至るまでの調査をせず、また木器一点を検出したのみで、埋め戻し保存したため、不明な点もあるが、わかりうる範囲でその構造を明らかにする。その構造は、各所によって若干

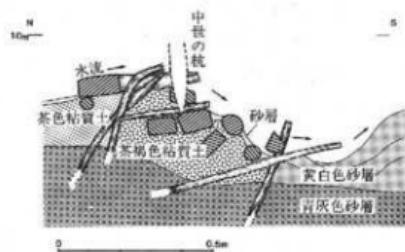


第19図 木組み平面図

の差はあるが、横桟は7~10本、縦桟の使用は概して少なく、横桟に対して、0.8~1m間隔で打ち込んでいるようである。材の使用法をみると、横桟には比較的大きな丸太材、あるいは角材を使用し、縦桟には角材、丸太材のほか板材の使用が目立つ。横桟は両側を丸太材（主として広葉樹系）とし、中央に長さ3m以上の角材（針葉樹系）として使い分けている。この角材のうち2本は明らかに他からの転用材とみられる。杭に使った材は広葉樹系の原材の枝をはらって先を鋭らしただけの簡単なものであり、細い材を使っている。構造保存土、底部まで完掘できないので、杭の長さは不明である。なお縦桟の使用材に明らかに木器が認められたため、抽出し、図示した。(211) 木組みの断面観察によると杭、縦桟によって土台をつくり、その斜上方へ丸太、角材をのせて横桟とし、縦桟を入れ、さらに横桟、そして上端に至ると、縦桟と

杭を打ち込んで木組みを固定している。なお、木組み交差における特別な結束物は検出されなかった。

木組み内外の土層をみると、木組み内の茶褐色粘質土は、人为的に入れられたようであり、この粘質土と木組みで水流を遮げていたようである。木組み北側の茶色粘質土は層状の細砂を含み、水流が停まることによって細砂、粘土が沈澱していくことを示している。木組み南側の上へはね上がる砂層は、水流が北から木組み



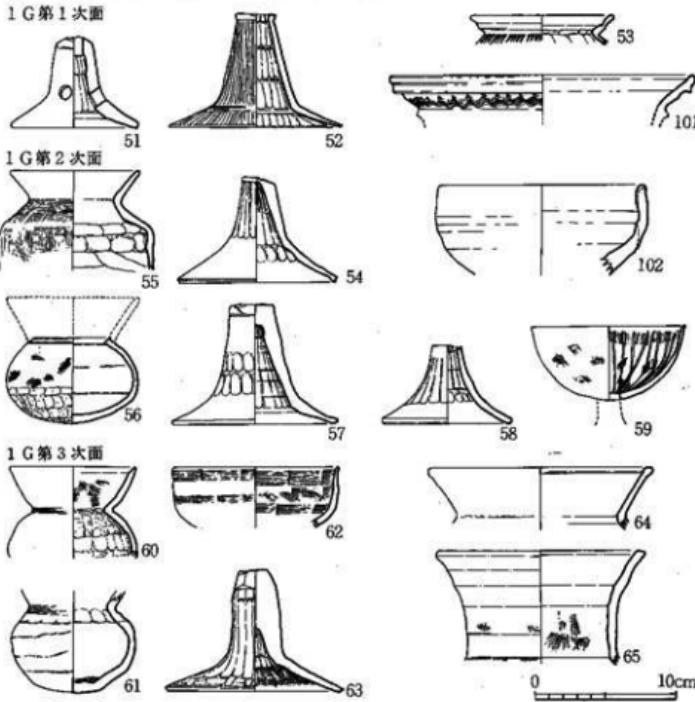
第20図 木組み断面図(一部復元)

を越してきたが、その勢いで、沈没していた砂層をはね上げた痕跡とみることができる。このようなことからこの木組みは堰として使用されていたと思われる。周辺から出土した遺物は少ないが、木組みに引っかかった状態で土師器表口縁部（82）があり、また、木組み南側の砂層中に、古式須恵器が1点出土していることから、C-7地区 VI、VII、VIII層に近い時期と考えられる。

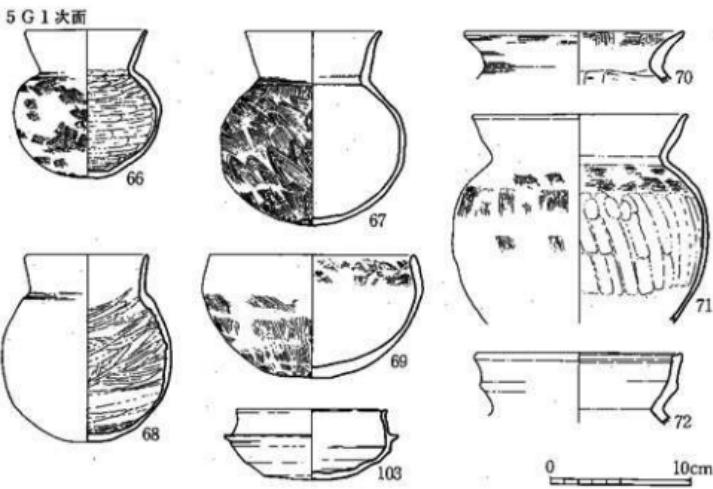
4. D-5地区の調査（第4次調査）

本地区は、第2次調査地区的北東120m、第3次調査地区的南東180mにあたるところで現在の糸田川の西330mのところである。

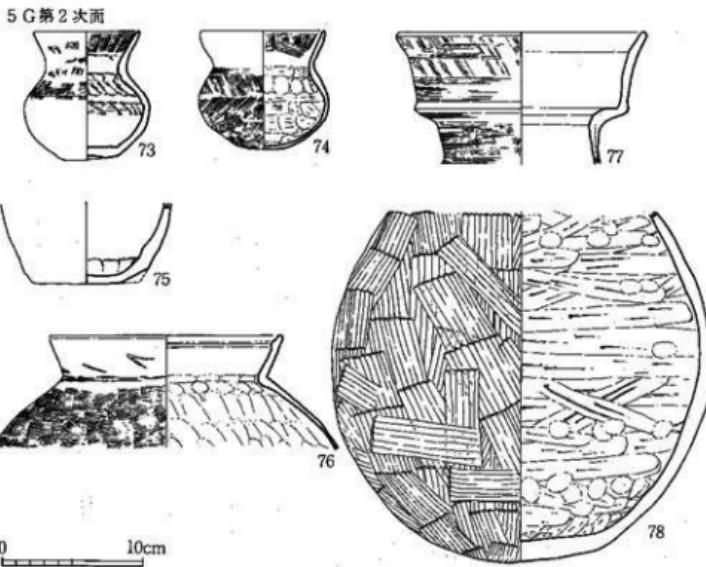
土層位は、旧水田面（I）下の灰色砂（II）、及び中世期の堆積である灰色粘土（III）・黃灰色粘土層（IV）がある。以下黒色粘土層になるが、本層中より1点の工作痕のある木片をみとめたのみで、土師器等の出土は全くなかった。以下の層序については、狭い坪の中では出水が激しく充分な観察はできなかった。基本的な層序についてはC-4地区、C-7地区ともにかわらない。ただ、中世期の堆積とみられるIII、IV層は、他の地区に比べて約2倍の60cmもある。



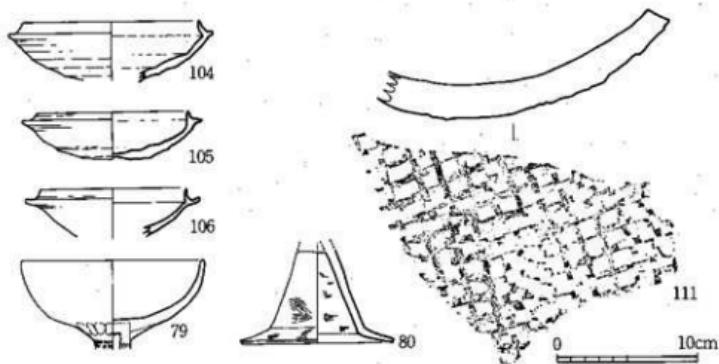
第21図 C-7地区 1G 1～2次面出土土器実測図



第22図 C-7地区5G1次面出土土器実測図



第23図 C-7地区5G2次面出土土器実測図



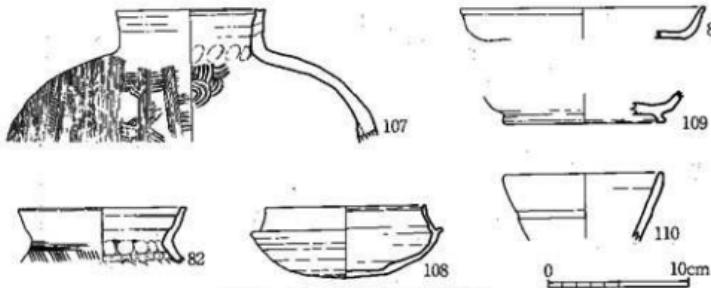
第24図 C-7地区河道内出土土器実測図

5. 出土遺物

出土遺物の個々については、簡便を期してできるかぎり、一覧表に表示したので、参照されたい。ここでは、遺物出土状況の大要を理解するため、若干の点を補足しておく。

C-7、C-4地区出土の遺物は土師器、須恵器、木製品、桃核(図版13)などである。

遺物を時期的に分類すると、中世期、奈良時代中期、奈良前(白鳳)期、古墳時代後期、古墳時代前期末といふことができる。このうち、中世期は、C-4地区溝状遺構に関するもの、奈良前(白鳳)期、古墳時代後期はC-7地区の河道内堆積土である。また奈良中期のものとして、C-7地区第V層、C-4地区V層出土のものがある。出土遺物の大半は、C-7地区古墳時代前期末出土のもので、しかも1G・5Gに集中した出土がみられた。層位的には、VI、VII、VIII層から出土した。この時期は、畿内を中心に、須恵器が集落内に急速に導入されかけた



第25図 C-4地区出土土器実測図

時期にあたり、須恵器を共伴する、しない、あるいはその量、器種などが重要な視点となる。ここでC-7地区の須恵器と土師器の共伴関係をみると、1Gでは第1~3次面まで須恵器が伴ない、5GではVI層においてのみ須恵器を検出した。ただ、C-7地区は造構に伴ったものでなく、また4×4mの狭いグリッド内での調査であるから、5G、VII、VIII層において、須恵器が出土しないと断定できないし、さらに一段階古い須恵器が共伴することも可能性として考えられる。次にこれらのC-7、C-4地区的VI・VII・VIII層出土に相当する土師器の数量を器種別にみると、第1表のごとくである。この数量は、完形遺物から破片までを数えたもので、壺、甕で口縁を持たないものや小破片、明らかに同一個体とみられるものは除いてある。また壺はかなり完形に近いものが多いので数値として実数に近いものとみられるが、甕については、大部分が小破片にすぎないので、個体数が

C-7地区

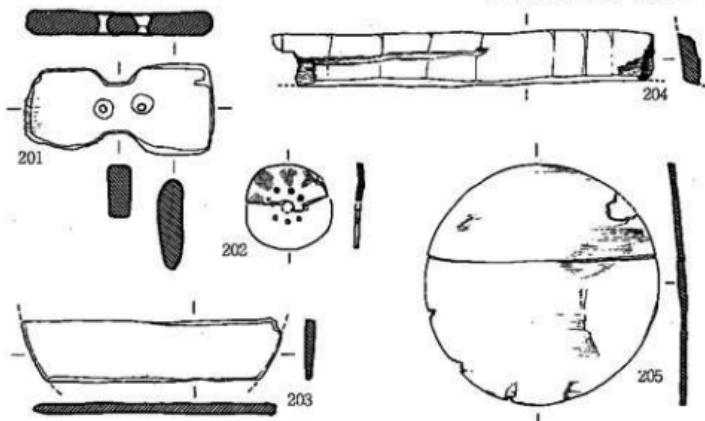
形種	個体
壺	大 8
	中 2
	小 9
甕	A 16
	B 15
高杯	杯部 19
	脚部 15
その他	8
須恵器	3

C-4地区

形種	個体
壺	大 0
	中 0
	小 1
甕	A 7
	B 5
高杯	杯部 4
	脚部 1
その他	0
須恵器	1

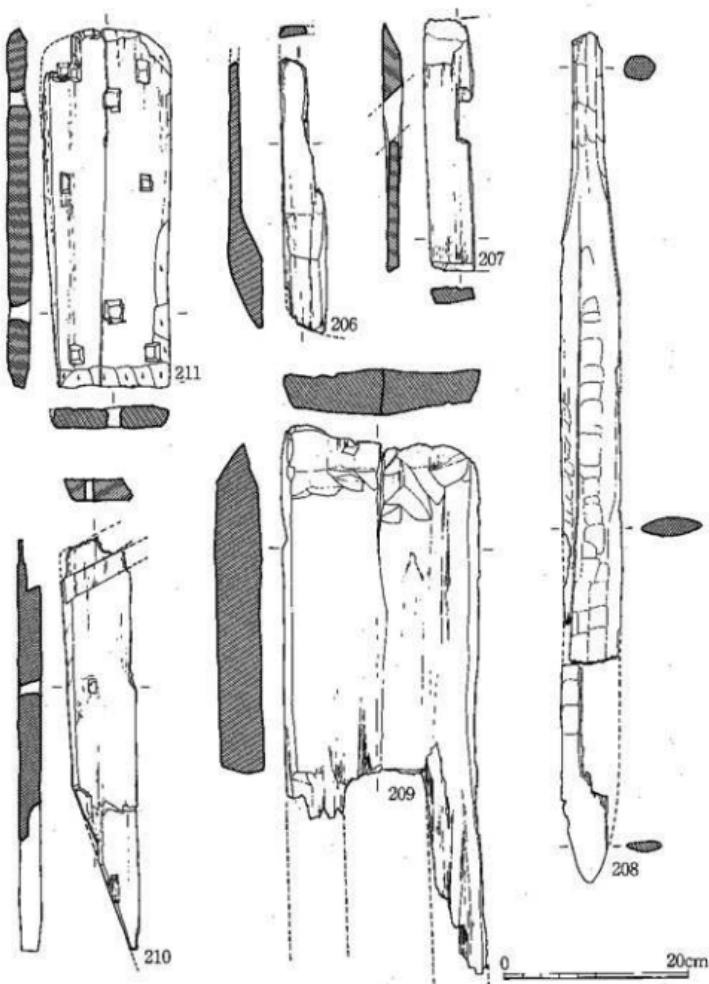
第1表 出土土器個体数一覧表(概数)

- (A) 口縁部が内湾ぎみに立上がり
肥厚するもの
(B) 口縁部が斜上方に伸びるか外
反する傾向を有するもの

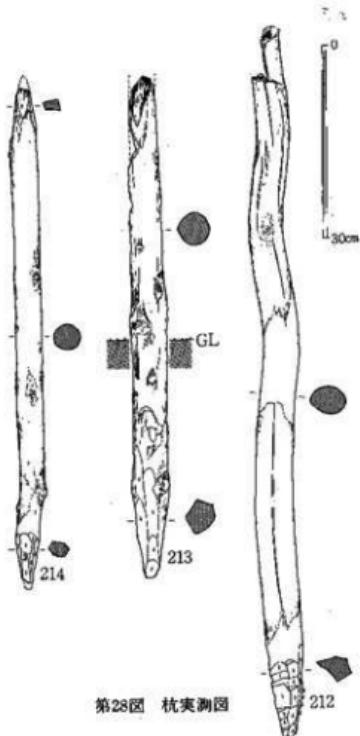


第26図 木製品実測図1





第27図 木製品実測図 2



第28図 杭実測図

重複しているかもしれない。一応の参考数値として表示した。

木器、木製品は、C-7、C-4地区において多量に出土したが、木片、木クズ等の遺物も多く、実数はつかめていない。代表的なもののみ図示し、一覧表に示した。C-7出土のものとしては、3G河道内出土の「浮子」とみられる双孔木製品(201)、5G出土の建築用材(209)、蓑身具(202)、木製容器片(206)などがある。C-4地区では、曲物底板(205)や、木組みに転用されていた大足(211)がある。C-4、C-7地区とも杭が比較的多く、原木の尖端を加工した程度のものである。その他、加工旗のない原木はきわめて多い。また巻いた桜の樹皮が数点出土している。木器具、容器等の結束に使用したと思われる。(図版第13)

出土遺物一覧表

器種・番号	法 量 (cm)	個々 の 特 徴	色 調	胎土・出土層位
51 高 杵	根部径：9.3 脚部高：5.6 現存高：6.5	脚部外面は丸方向ナデにより平滑。内面は紋り目 +削り痕。頭部は肥厚し、丸くおさまる。 外方より3孔が穿たれる。	内面：灰褐色 外面：" 砂粒含む。 断面：茶褐色	0.1~0.2m位の 砂粒含む。 1G 1次面
52 高 杵	根部径：12.4 脚部高：7.6 現存高：8.1	脚部外面は荒い櫛刷毛。内面は横鉗削り(右→ 左)。2段の接合痕が遺存。頭部は丸くおさまる。	内面：茶褐色 外面：淡茶褐色 断面：茶褐色	0.1m位の砂粒 少墨含む。 1G 1次面
53 棗	口 径：10.3	口縁部は2段に短く外反し、所謂、S字状口縁 をなす。脚部外面は荒い櫛刷毛。内面横鉗削り。 (外側蝶付着)	内面：茶灰色 外面：黒灰色 断面：茶灰色	精良 1G 1次面

54 高 杯	脚部径: 11.4 脚部高: 7.2 現存高: 7.5	脚部内面は枚り目+横覽削り(右→左)。外面は 縱覽磨き+乱方向ナデにより平滑。端部は方形近 くにおさまり、両面を呈す。	内面: 茶灰色 外面: " 断面: 茶灰色	緻密・精良 1 G 1 次面
55 臺	口 径: 9.3 体部径: 11.3	口縁部は体部よりくの字形に外反し、直ぐに 伸びる。内外面とも横刷毛+横ナデ。体部外面は 刷毛、内面は施削り。(外面煤付着)	内面: 茶灰色 外面: 茶褐色 断面: 茶灰色	0.1~0.3cm位の 砂粒含む。 1 G 2 次面
56 小 型 丸底盃	体部径: 9.4 現存高: 6.2	体部下半外面は横覽削り(右→左)、上半は刷毛 +横ナデ。内面には接合痕が2段遺存。 器厚0.4~0.7cm	内面: 茶褐色 外面: 茶灰色 断面: 茶褐色	0.1cm位の砂粒 含む。 1 G 2 次面
57 高 杯	脚 高: 11.9 脚 高: 7.6 現存高: 8.6	脚部外面には2段の指圧痕。内面は挿さし痕+ 横覽削り。脚端部は丸みを持つ方形におさめられ 内外面とも横ナデ。	内面: 漆茶灰色 外面: 茶灰色 断面: 茶褐色	緻密・精良 1 G 2 次面
58 高 杯	脚部径: 9.3 脚部高: 5.5	脚部内面は枚り目。2段の接合痕。外面は縱覽 磨き。脚端部は方形におさまり、両面は横ナデで 平滑。	内面: 茶灰色 外面: " 断面: 明茶灰色	0.1cm位の砂粒 含む。 1 G 2 次面
59 高 杯	口 径: 11.1 杯部高: 5.2	底部より曲線的に口縁端部にいたる半球状の杯 部。内外面とも刷毛+横ナデ。内面には乱れた放 射状暗文。	内面: 茶灰色 外面: 赤褐色 断面: 赤褐色	0.1cm位の砂粒 含む。 1 G 2 次面
60 小 型 丸底盃	口 径: 9.0 体部径: 9.4 口縁部高: 3.0	体部との境で横ナデが確かえされることにより 二重口縁様を呈する。体部内面は横覽削り(左→ 右)。器厚0.5cm前後	内面: 茶褐色 外面: 茶灰色 断面: 灰白色	0.1cm位の砂粒 含む。 1 G 3 次面
61 小 型 丸底盃	体部径: 8.9 現存高: 6.0	口縁部は単純に外反し、外面には荒い横ナデ。 体部は球形、不安定な丸底で、4段の接合痕を遺 す。底部内面は荒くナデただけで仕上げられる。	内面: 黒灰色 外面: " 断面: "	1 cm位の小塊 部分的に含む。 1 G 3 次面
62 杯	口 径: 12.0 現存高: 4.3	底部より曲線的に移行し、直線的に立ち上がる ものと思われ、端部は丸くおさまる。内外面とも 横刷毛(左→右)。	外面: 赤灰色 内面: 茶褐色 断面: 赤褐色	精良
63 高 杯	脚部径: 12.7 現存高: 8.7	脚柱部上半が中実で、内面は横覽削り+刷毛。 外面は縱磨き+ナデ。	内面: 明茶灰色 外面: " 断面: "	0.3cm位の砂粒 を含む。 1 G 3 次面
64 臺	口 径: 16 口縁部高: 3.3	口縁部は体部よりくの字形に外曲し、内湾気味 に伸びる。端部は内側へ丸味をもって肥厚する。 内外面とも横ナデ。(煤付着)	内面: 茶灰色 外面: 黑灰色 断面: 茶褐色	0.1cm位の砂粒 多く含む。 1 G 3 次面

65 壺	口 径：15.0 口縁部高：7.4	斜め上方にやや外湾気味に伸びる口縁部。端部はやや厚みをもち、狭い間をなす。内外面とも刷毛+横ナデ。	内面：茶灰色 外面：# 断面：明茶灰色	0.1cm位の砂粒 を含む。 1 G 3次面	
66 小 型 丸底壺	口 径：8.7 器 高：10.7 体部径：10.6	口縁部は基部で外反し、直立気味に伸びる。体部外面は乱方向刷毛、内面は幅の狭い横窪削り(右→左)。底部は荒による搔き取り、器厚0.5~0.3cm。	内面：茶灰色 外面：淡茶灰色 断面：灰褐色	0.1cm位の砂粒 を含む。 5 G 1次面	
67 壺	口 径：9.7 器 高：13.9 体部径：13.3	口縁部はほとんど真直ぐに外方に伸び、上端はやや薄くなり、端部は丸くおさまる。体部外面は刷毛、内面はナデ。ほぼ外面全体に焼付着。	内面：黒褐色 外面：茶褐色	0.1cm位の砂粒 を含む。 5 G 1次面	
68 壺	口 径：9.0 器 高：13.4 体部径：12.2	口縁部は短く直立し、端部は丸くおさまる。体部内上面位は荒い斜め窪削り(左上→右下)、下位は横窪削り(右→左)。底部は荒による搔き取り。	内面：茶灰色 外面：明茶灰色 断面：赤褐色	0.1cm位の砂粒 を含む。 5 G 1次面	
69 鉢	口 径：14.8 体部径：16.0 器 高：8.8	底部より曲線的に移行し、内湾して立ち上がる。端部はやや肥厚し、丸くおさまる。外面中位は斜め刷毛による強い搔き取り、外面上半に焼付着。	内面：赤褐色 外面：黒褐色 断面：茶灰色	0.1cm位の砂粒 多く含む。 5 G 1次面	
70 甕	口 径：15.8 口縁部高：2.6	短かく立ち、ゆるく外反する口縁部。内外面とも横刷毛+横ナデ。頸部内面は横窪削り(右→左)。外面には焼付着。	内面：明茶灰色 外面：茶褐色 断面：茶灰色	0.1cm位の砂粒 を含む。 5 G 1次面	
71 甕	口 径：15.5 体部径：18.4	体部よりくの字形に屈曲外反する口縁部。体部外面は厚い焼付着。内面は極めて平滑に窪削り、器厚0.3cm前後。	内面：濃茶褐色 外面：黒褐色 断面：濃茶褐色	黒雲母を多量 に含む。 5 G 1次面	
72 壺	口 径：15.0	口縁部は肥厚し、口縁部の中途に外側に鋭い棱を、内側に抉い段を形成し、二段に屈折して外反する。内外面とも強い横ナデ。外面に焼付着。	内面：灰白色 外面：黒褐色 断面：黒灰色	0.1~0.2cm位の 砂粒を含む。 5 G 1次面	
73 壺	口 径：7.7 器 高：9.1 体部高：9.1	口縁部はゆるやかに外反し、端部は丸くおさまる。体部内上面位は指圧痕と強いナデ、下位は横窪削り(右→左)。半底を呈し、内面は指圧痕。	内面：黒灰色 外面：淡黒灰色 断面：黒灰色	砂粒多く粗雑 な胎土。 5 G 2次面	
74 小 型 丸底壺	口 径：9.0 器 高：8.5 体部径：9.5	口縁部は基部で外湾し、そのまま外上方に伸びる。端部は難くおさまる。体部外面は刷毛、内面は指圧痕と横窪削り(右→左)。器厚0.3cm前後。	内面：灰褐色 外面：# 断面：赤褐色	0.1cm位の砂粒 を含む。 5 G 2次面	
75 壺	底部径：7.6 現存高：5.8	平底で、外面はごく細かい刷毛+横ナデ。内面は指圧痕+丁寧な乱方向ナデにより平滑。	内面：黄褐色 外面：赤褐色 断面：黒灰色	0.1cm位の砂粒 多く含む。 5 G 2次面	

76 甕	口 径: 16.7 現存高: 8.3	口縁部はくの字形に外反するが、外反角度は鈍い。端部は内方に肥厚し、内傾面を有する。体部内面は横窪削り、外面は刷毛(左→右)。	内面: 灰褐色 外面: 深灰褐色 断面: 茶灰色	0.1cm位の砂粒含む。 5 G 2次面
77 甕	口 径: 18.0 口縁部高: 9.3	二重口縁で脇折部の外側は突出し、段を有する大型品。段は生乾きの下段部上に上段部を貼付して形成され、下段部上段は擬口縁状をなす。	内面: 茶灰色 外面: 赤褐色 断面: "	0.1cm位の砂粒含む。 5 G 2次面
78 甕	体部径: 27.3 現存高: 25.0	やや長制化した体部。外面は荒い刷毛、内面は横窪削り(右→左)。底部内面は荒による強い搔き取り。5段の指圧痕が認められる。器厚0.6~1.5cm。	内面: 灰褐色 外面: 黄灰色 断面: 灰白色	0.5cm位の小理含む。 5 G 2次面
79 高杯	口 径: 13.2 杯部高: 5.7	楕状の杯部をもち、口縁部は直立して終わる。端部は抉い面をなす。内外面とも横ナデ。底部は乱方向ナデ。	内面: 鮮赤褐色 外面: " 断面: "	0.1cm位の砂粒含む。 3 G 河道内
80 高杯	脚部径: 11.0 現存高: 6.5	脚部内面は荒い鉛削り(右→左)+横ナデ。脚端部は方形におさまる。	内面: 茶褐色 外面: 赤褐色 断面: 赤灰色	0.1cm位の砂粒含む。 3 G 河道内
81 甕	口 径: 17.7 器 高: 2.3	口縁部両面は横ナデ。外面下半は回転痕がみられる。内面は乱方向ナデ。	内面: 灰褐色 外面: 茶灰色 断面: 茶灰色	精良 C - 4 茶褐色土
82 甕	口 径: 12.0 口縁部高: 2.4	体部よりくの字形に屈曲外反する口縁部。口縁端部は方形におさまる。体部内面は豊削り、外面は細かいタタキ目か?	内面: 茶灰色 外面: 淡茶灰色 断面: 茶褐色	0.1cm位の砂粒含む。 C - 4 木組み
83 甕	口 径: 22.0?	口頭部から大きく外反して、やや内反ぎみに立上がる。口唇部はやや肥厚し、口輪下に突帯、さらに口頭に突帯を施す。突帯間に1条の波状文(歟数7本)。	灰白色 器内: 赤褐色	1 G 第1次面
84 甕	口 径: 14.0	厚ぼったい作りの体か。口縁はやや内傾ぎみに立上がり、丸く仕上がる。体部下半はヘラ削り、他はヨコナデ。	灰白色	1 G 第2次面
85 杯	口 径: 10.7 器 径: 12.5 器 高: 5.1 立ちあがり: 1.5	全体にシャープで丁寧な仕上げをする。立上がりは、途中より直立し、口縁は鋭く面を取る。受部も水平に引伸ばし続い。体部外面は大半をヘラ削り。2条のヘラ記号割線をのこす。	内面: 青灰色 外面: 暗灰色	5 G 第1次面
86 杯	口 径: 12.6 器 径: 14.8 器 高: 4.3? 立ちあがり: 0.8	全体としてシャープさを欠く調整。立上がりも内傾し、端部でやや直立する。受部もにぶい。底部外面ヘラ削り。	内面: 淡灰色 外面: 灰色	3 G 河道内

105	口 程: 10.8 器 径: 13.0 器 高: 3.3 立ちあがり: 0.5	器程のわりに、立上がりの退化が目立つ。底部へラケズリも粗く、退化ぎみ。一部にへラ切り痕がのこされる。焼成やや不良。	内面: 黄灰色 外面: 灰褐色	3 G 河道内
106	口 程: 10.5 器 径: 12.6 器 高: 3.3 ? 立ちあがり: 0.7	立ちあがりが筋曲し、よりさらに小型化する。 自然釉のためへラ削り痕は不詳。	暗灰色	3 G 河道内
107	口 程: 10.7 横 斧	口縁外、体部外の破片。体部全体に濃厚な緑色自然釉。口縁は、特に口唇部の表現なく、端面をくぼませて成形。体部平行叩き目を施したちкаき目調整。内面は同心円叩き目。	灰白色～灰色	C - 4 茶褐色土
108	口 径: 11.6 杯	細く、内傾した高い立ちあがりをもつ。端部内面は凹線。底部外面の大半をへラ削り調整する。 2条のへラ記号刻線あり。	外面: 灰白色 内面: 灰色	C - 4 第Ⅳ層(擾乱)
109	高台径: 11.6?	底部細片のため、詳細不明。高台はやや踏んぱり型の貼付高台。	青灰色	C - 4 茶褐色土
110	口 程: 15.3 平盤か	直線的に外方へ立上がる口縁部破片。頸部にゆるやかな凹線が1条回る。内面うすく自然釉。粘土中、白色砂が混じる。	灰色	C - 4 茶褐色土
111	厚: 1.8~2.2 瓦	破片のため、寸法は不明。上面は側端をのぞく大半は布目をへラ削りで消している。下面は、格子状叩き目をのこす。下面は一面カットで面取りはない。柄巻分分割造りか。	灰色 (須恵質)	3 G 河道内
201	長: 11.5 浮 子	極目板村を長方形に切り、中央にくびれを入れ、2孔をあけたもの。四方は磨耗痕が残り、丸みをおびている。片側に火を受けた痕跡がある。杉材。		3 G 河道内
202	長: 5.5 装身具か	径5cm程度の不整円形をした装身具とみられる。厚さ1~2%の薄板を不整円形に切り、中心に6%、周囲8個所(推定)に1~2%の小円孔を穿孔し、表面に放射状に墨漆を塗付したもの。ツゲ材。		5 G 第2次面
203	厚: 0.6 底板か	円形の薄板で、容器底部と思われる。		1 G 第3次面
204	木板片	角材片・表面を丁寧に手斧をかけて製材したもの。		C - 4 茶褐色土

26	木物底板	長：14.2～14.6	ほぼ正円に近い底板。厚さは3%～6%とかなり不均正で、表面も若干の凹凸がある。柱目板を使ったもので材質は良い。	C-4 茶褐色土
27	骨器	長：30.0 (現存)	木製容器の破片と思われる。厚さ3.6cmの材の中をくり抜いたもので、底部厚1cm。針葉樹系。	1G第1次面
28	頭	長：27.2 (現存)	厚さ1.1～2.0cmの材料に、斜行して長方形の柄穴を穿ったもの。耕作具と思われる。	5G第1次面
29		長：93.0以上	広葉樹系の材を巾6.4cm厚さ2.0cmの断面長楕円形に成形したもの。一方には巾3.7×2.6cmの柄を作り出している。全面を手斧で丁寧に整形している。尖端は比較的鋭く、刺先状を呈する。	1G第3次面
30	建築材	巾：22.0以上 厚：4.8	針葉樹系の角材に、巾9.8cmの長方形穴を穿ったもので、建築材と思われる。片方を鋭利な刃物で乱雑に切断している。	5G 第2次面
31		厚：2.4	針葉樹系の板材の片側を斜方向に切り、側方近くに方形穴がみられる。他方は、やはり斜方向に向って削られている。性格不明	3G 河道内
32	大足	長：39.2 巾：14.0 厚：2.0	ヒノキ材の片方を隅丸方形に成形し、3穴、2穴、3穴と計8箇所の方形穴を穿つ。上下面とも、短側縁を手斧により面取り。	C-4 木組み
33	杭	全長：111.4 以上 太さ：5.8	小枝を払った丸太材を、樹皮をつけたままで一方を加工して杭としたもの。曲屈した材を使用している。	5G第2次面
34	杭	全長：77.5 以上 太さ：5.4	ほぼまっすぐな丸太材を加工した杭。杭先から37cmのところから、表皮の遺存の状況が変化し、この線まで打込まれていたと考えられる。	5G第1次面
35	杭	全長：79.0 太さ：4.0	小枝を払った丸太を樹皮をつけたまま、両方を加工した杭。転用材か、あるいは別目的のための材か。	C-4 茶褐色土

第5章 総括

丘陵部の調査については、すでに、第3章5節において結語としてまとめてあるので、ここでは、第4章、平地部の調査に関してのみまとめることにする。

1. 基本層序について

3次にわたる坪掘り調査により、平地部における層序的関係と、遺跡の立地がかなり明確になってきた。C-7地区の成果によると、特に、人為的な造構を伴わず自然層位のみ検出した5G・4Gにより、層序をまとめると、次表のようになる。

層位	土層名	標高(m)	時代
I層	黒色土層(旧水田面)	1.72~1.60	現代
II	黄褐色砂層	1.60~1.48	
III	灰色粘土層	1.48~1.20	中世
IV	茶褐色粘土層	1.20~1.05	古代・中世?
V	茶黒色粘土層(砂混り)	1.05~0.90	奈良
VI	暗灰色枯土層	0.90~0.75	古墳
VII	黒灰色粘土層	0.75~0.66	古墳
VIII	暗灰色粘土層	0.66~0.46	古墳
IX	青灰色砂層	0.46~	弥生?

第2表 C-7地区、5G・4Gによる土層序 (標高は平均値)

III層はほとんど遺物は包含しないが、稀に中世陶器片を含むことがあり、C-4地区における溝状造構の状況から、中世の層位とみて誤りはない。

IV層は明確な遺物はなく、今後の調査に待つが、各地域の調査所見より古代末～中世初頭の可能性を考えている。

V層は古墳時代の土器のみでなく、各地区で歴史時代の資料が出土しており、奈良時代(平城期)中頃のものである。特記すべきことは、粘土層を主体としながらも、白色砂層のブロックを混入したり、あるいは砂疊混りであることが多く、当地がこの時期に洪水に見舞われたことを証明している。

VI・VII・VIII層はいずれも灰色粘土を基調とするもので、古墳時代の土師器・須恵器の包含層である。VIII層は、特に炭の混入が目立ち、色調も黒灰色を呈する。この3層は、各グリッドにおいては、遺物出土状況にばらつきがあるが、造構に伴なうばらつきではないので、出土状況自体はそれほど重視せねばならないものでもない。

IX層は、出土遺物はないが、C-8地区の調査では、この層中より弥生中期の土器片が出土しており、弥生時代とした。以上がC-7地区の基本層序であるが、C-8、C-4、D-5においても大略は同様な層序を示している。

2. 集落の立地

C-8地区の調査の成果とも考え合わせると、平地における古墳時代の住居群、土塹群は、V層下の発達した青灰色粘質土層上に掘込まれており、その標高が+1.0m前後であることがわかる。すなわち、C-7地区におけるVI・VII・VIII層の土器包含層位が標高+0.90~0.46mであることを考えると、住居址、土塹等は、これらその後背湿地帯の中のやや発達した微高地に建てられていることがわかる。その位置はC-8地区で検出した外、C-7地区では青灰色粘土層を1G東北隅でみとめているように、同地区の東北辺の可能性が高い。このようなことから全体の集落像を想定すると、遺跡範囲内の広範囲に発達した微高地があって、建物群が密集するというよりは、本地域に縦横に河道が走り、その間際に発達した島状の微高地上に、建築物・土塹等が構えられていると考えた方がより妥当である。微高地の周囲には、湿地帯が発達し、生活資材（土器・木器等）の多数の遺物が遺棄されており、また漂着した流木等も多いとみられる。また、河川に伴なう堰・護岸の設備、あるいは橋などの発見される可能性も高く、したがって集落域外でも遺構・遺物の発見される事態もありうるわけで、今後の開発行為に対する充分な監視が必要である。

3. 集落の性格

基本層序で明らかのように、古墳時代の遺構面は標高+1.0mの低位にあり、古墳時代の自然環境をも考慮すれば、きわめて海岸汀線に近い集落の一つといえるのではないか。本年度の住居址の検出数がきわめて少ないので、集落の全体像はつかめないが、出土遺物に浮子、C-8地区では土鍤などがあり、生業の一端を想起することができる。

最近の地質学の成果によると、弥生時代～古墳時代前期は、大阪平野においては、上町台地北方に発達した砂洲が最も北へのびてきた時期とされ、この所見に従うならば、垂水南遺跡の南西方、現神崎川の対岸近くにまで砂洲が発達していたことになる。⁽¹⁵⁾ 大阪市東淀川区にある崇禪寺遺跡は、ちょうどこの発達した砂洲上に立地する弥生後期遺跡として位置づけられているが、⁽¹⁶⁾ 神崎川の南岸の十八條町で検出された弥生後期の土器は、さらにその北方、砂洲最北端に位置し、ここに所在する集落は河内湖と大阪湾の湾口において、位置的に垂水南遺跡と対峙することとなる。すなわち、垂水南遺跡は大阪湾から河内湖への入口の北岸をしめる集落とみるとことができ、自然環境のみでなく、集落の政治的役割も今後の調査や資料分析の段階で、充分に検討されなければならない。

4. 古墳時代の木組みについて

C-4地区で検出された木組みは、若干の移動を受けているようであり、また保存上、木組みの取上をしていないので、構造上にも完全には知られない点もある。しかし、平面・断面(一

部復原) 図によって、基本的な構造は知ることはできたので、本文中やや詳しく記述しておいた。古墳時代の堰については、その規模から全国の注目をあびた愛媛県松山市古照遺跡がある。⁽¹⁷⁾ また近辺の資料としては、農中市利倉遺跡例がある。

これらの調査例と比較すると、本遺跡例は、横桟を受け、あるいは固定する縦桟や杭が古照・利倉例のように間断なく打込まれるのではなく、0.6~0.7m 間隔で打込まれていたらしく、結果的には、横桟に対して縦桟の数量がきわめて少いことがわかる。この構造であると、流水に対する耐圧力が問題となり、木組みは、堰ではなくて水路の護岸ではないかとの解釈も可能となってくる。しかし、木組み断面図をみても水路岸を想定しうるような土層の変化はなく、また堰南側の細砂層の堆積をみて、水流が北から南へ堰を越えて流出していることを示しており、護岸との解釈も不適である。堰が水流に対して設置されていることを想定すると、水流は北方から南方へ流れていると考えられるが、狭い範囲での調査であるので、明確な水路の方向は今後の調査の課題である。また、付近でも、同様な木組みが出土したとの証言もあり、このような堰が1ヶ所に止まらないことを示しているが、この点も今後の課題である。

5. 旧河道について

C-7 地区の1・2・3Gにおいて検出された白色砂層は、砂の流れにより、河道であると判断できる。北西から、東南へ流れる河川であることより、これは丘陵部に源を発するものであろうと考えられるが、本地点のみでは明確にできない。巾は9m以上もあるにもかかわらず深さは最大0.94m しかないことや、I、IIトレンチで明らかなように、護岸設備を持たないこと、河岸の状況が不成形であることなどから、人為的に掘削された河道ではなさそうである。

河川の時期であるが、河道内堆積土中から遺物の出土は少ないので、また河川という性格からみて周囲の多様な遺物が混入することも考えられるので、断定はできないが、最も古い堆積層から6世紀後半~末に至る須恵器(104、105、106)が出土しており、中位層より白鳳期の特色をもつ平瓦が出土していることより、一応この時期に比定できる。河道最上層からは、8世紀中頃の須恵器、土器等が出土しており、このころには河川としての用をはたさなくなっていたといえる。この時期は、当地で奈良時代中期の洪水を想定している時期に相当する。

この河道については、垂水南遺跡で住居群、土塙群の出現する古墳時代前期~後期初頭のころのおびただしい遺物はほとんど混入しておらず、古墳時代集落の廃絶後に本河川が流れたとみられる。

河道内で出土した平瓦(111)は、千里丘陵周辺における当期の寺院址との関連で注目に値する。江坂町で、かって発見された平瓦との類似点も多く、周辺に白鳳期の寺院址の存在する可能性を指摘しておきたい。

6. 中世の溝状遺構について

C-4 地区で検出された溝状遺構は、溝内より明確な遺物が検出されなかったので、その時期については、断定できないが、第III層はおむね中世期に相当すること、あるいは溝状遺構

の検出に前後して、瓦器細片を認めていたことなどから、一応鎌倉時代を中心とする時期としておく。

C-7地区検出の河道、あるいはC-8地区で検出された古墳時代住居址群が、条里地割に対し、大きく傾斜するのに対し、この溝状遺構は、現存する条里地割の方位にはほとんど一致する。C-4地区は既に復元されている豊島郡中条の条里地割に比定すると、二条一里の29坪の南界、32坪の北界の地点にあたるらしく、その地点で条里地割の方向に一致する溝状遺構が検出されたことは大きく注意してよい。本溝がこの両坪を界する溝かどうかの判断は、区画整理によって条里畔が破壊されつくした今日においては、比定に困難な面もあり、さらにもっと広範囲な溝の検出を経て判断されよう。

ただ、今年度の調査では、古代末以降の莊園関係遺構は他の個所では検出されなかっただけに、本地区的杭列を含めて、今後に大きな課題と期待を残すことになった。

7. D-5地区の調査成果について

本地点については、一点の木片を除いて、遺構、遺物の検出は認められなかった。したがって、垂水南遺跡の中核は、本地点以西でもって、東端となすようである。土層序からみて注目すべきことは、第III層にあたる粘土層（本地点では灰色粘土層・黄灰色粘土層）が、C-7、8、4地区などに比べて、きわめて厚いことである。つまり、中世期における堆積とみられるこの粘土層は、他の地点では平均20cmしかみられないのに対し、本地点は60cmもみられる。本地点が、C-4、7、8地点より地表位が高いのは、地形図で明らかのように、本地点の東方を流れる糸田川の堆積作用を受けた結果であって、この点を土層観察によれば、中世期の粘土層の堆積（第III層）がそれを物語っている。この粘土層の上昇は、糸田川の河底の上昇の結果、天井川化することによって、その河道両側の堤防、あるいは後背地が上昇した結果であるとみられるので、糸田川の流路固定と大きなかかわりをもつてゐるはずである。

つまり、千里丘陵から大量の土砂をはき出す糸田川の固定化の時期は、（早くても古代末）おそらくは中世期に至るであろうことをこの粘土層は証明していることになる。西方の高川、天竺川もおそらくは同様な開発状況を呈したであろうし、この開発行為は垂水庄を始めとする諸莊の水田安定化にとって不可欠であったはずである。条里地割の追求とあわせて、中世史的分野の解明に今後の課題としたい。文献史学の立場から、櫛坂郷内の中世村落を復元する努力もみられるので、考古学との一層のタイアップが必要である。⁽²⁰⁾

8. 出土遺物について

出土遺物は、土師器、須恵器、木製品、自然遺物などである。これらは、河道内出土を除いて、遺構に伴ったものではなく、C-7地区の、特に1G・5G出土資料の層位的な検出は、集落域外縁の低湿地的様相という立地から判断すると、100パーセント前後関係を信頼できるものとも断言できない。つまりいくつかの時期的な間隔をもって2次的に形成された包含層の一括として取り扱わざるをえない。本地点出土遺物のうち古墳時代集落址の時期を示す多数の土師器、

須恵器について述べると、畿内における概ね古墳時代前期の土師器である布留式土器の範疇に含まれるが、さらに、河内の資料によって、二分されたうちの後半期である小若江II式を一時期とできる。土師器のうちでも、最も特色をあらわす、小型丸底壺、器台などの様相をみるとC-7地区の出土遺物は、小型丸底壺の体部が口縁部を凌駕する点や、器台形土器が1点もみられないこと、小型丸底壺の粗雑化、形態の不整化などはいずれもその後出る要素とみてよい。⁽²¹⁾ 5G1次面出土の一連の完形壺形土器群は、吉備の資料ではあるが、分層発掘された、高島遺跡の王治IV層出土資料に類似点をみることができる。王治IV層は須恵器を伴出しないとされているが、報告者は「一般的に伴わぬかは問題である」とされており、吉備と畿内との地域差、あるいは、5G1次面で伴出している須恵器が、王治III層出土の須恵器よりかなり古式を呈する点を考慮すれば充分に比較資料となりうる。

土師器に伴なう須恵器は、本市では最古段階のものといえ、貴重な資料といえる。泉北丘陵の窯跡出土資料によると、TK208に対比することができるのではないか。⁽²²⁾

これらの出土資料に、C-7地区出土資料より古相を呈する、C-8地区的遺構出土資料を考え合わせると、古墳時代集落は5世紀前半から継続して生活の場となり、出土須恵器が下限を示す5世紀の後半、おそらくは5世紀末頃までは集落が継続したことを想定できる。

このような時期の集落を周辺でみると、土塗、高床式建物を検出した豊中市勝部遺跡は、C-8地区的遺構との共通性が見出せるほか、埴、柱穴群を検出した利倉遺跡は、C-4地区との関係で見逃すことができない。また、最至近距離にあるものとしては、吹田市藏人遺跡が注目される。ずっと西方では、製鉄址の可能性をもつものとして注目された尼崎市若王寺遺跡が同期のものとしてあるが、若王寺遺跡の方が存続期間が長期にわたるようである。千里丘陵東方では、鳴上郡家遺跡が、特に多くの古式須恵器を伴出する遺跡として位置づけられる。古墳時代の集落址については、最近になって、実体が解明してきた遺跡が多く、垂水南遺跡もその一つとして、今後の調査成果を期待したい。

個々の土器については、もっと整理に時間を費す必要があり、さらに、C-8地区の多量の土師器群の整理を経ないと本遺跡の実体の把握ができない。

個々の遺物のもつ重要性も、今後の調査、整理の進行に待ちたい。

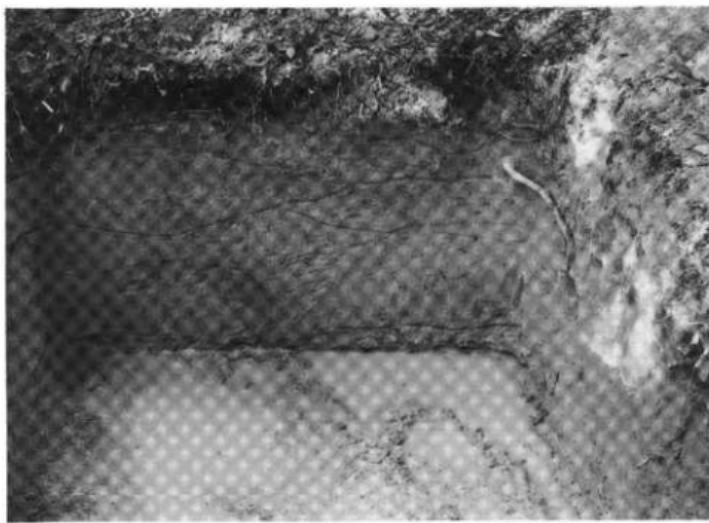
註

- (1)垂水遺跡第一次調査の燒土塗でも、墓塗の可能性を考えてリン分析を行なったが、検出されなかった。
- (2)吹田市教育委員会、関西大学考古学研究室、「垂水遺跡第2次調査概報」1975年
- (3)豊中市教育委員会、「勝部遺跡」1972年
- (4)田能遺跡発掘調査委員会「田能遺跡概報」1967年
- (5)関西大学「摂津加茂」1968年
- (6)田代克巳「日本考古学協会昭和46年度大会研究発表要旨」1971年
富田好久「考古学上に現われた池田」「新版池田市史概説論」1971年
- (7)芦屋市教育委員会「会下山遺跡」1964年
芦屋市史編集室「新修芦屋市史資料編1」1976年

- (8) 豊中市史編纂委員会「箕面市史第一巻」1964年
- (9)(8)と同じ
- (10)神戸市教育委員会「伯母野山弥生遺跡」1963年
- (11)上田哲也、河原隆彦「播磨の弥生文化」1966年
- (12)西宮市教育委員会「仁川五ヶ山遺跡」1975年
- (13)田能道跡No.304注(4)、五ヶ山遺跡注(2)など
- (14)注(4)と同じ
- (15)梶山彦太郎・市原 実「大阪平野の発達史」『地質学論集 第7号』 1972年
- (16)宮本照男氏所蔵
- (17)古照遺跡調査会本部他「古照遺跡」『松山市文化財調査報告書IV』 1974年
- (18)島田義明・柳本照男「利倉遺跡」1976年
- (19)若村正博氏所蔵
- (20)武藤 直「浜津垂水牧横坂鄰と集落」『地形図に歴史を読む』 1968年
- (21)横山浩一「手工業生産の発展—土師器と須恵器—」『世界考古学大系III』 1959年
- (22)坪井清足「岡山県笠岡市高島遺跡調査報告」 1956年
- (23)田辺昭三「陶邑古窯址群」 1966年
- (24)豊中市教育委員会「勝部遺跡」 1972年
- (25)尼崎市教育委員会「若王寺遺跡発掘調査概要」 1966年
- (26)大阪府教育委員会「鳴上郡衛跡発掘調査概要・II」 1972年
- (27)島田次郎他「日本中世村落史の研究」



1次調査地域全景 南西から



R 07 西壁

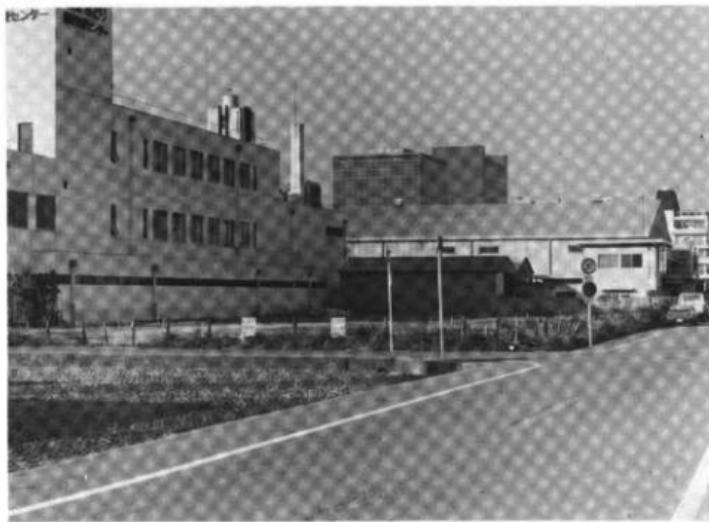


H - 0 4 土 墓



K 0 3 土 器 · 古 錢 出 土 狀 態

版第三 平地部調査前の景観図

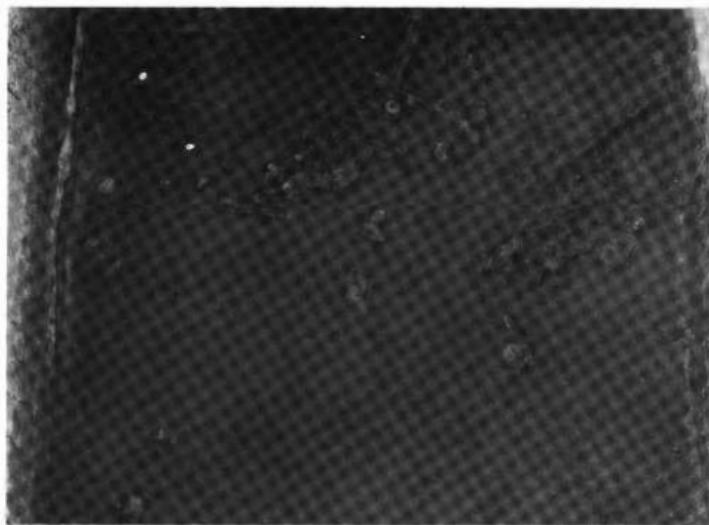


調査前のC-7地区



調査前のC-4地区

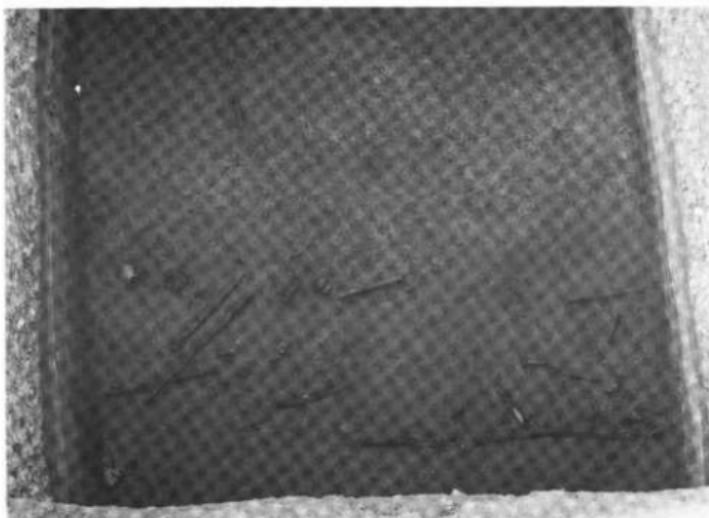
圖版第四
C · 七 地 区



I G 遺 物 出 土 狀 況



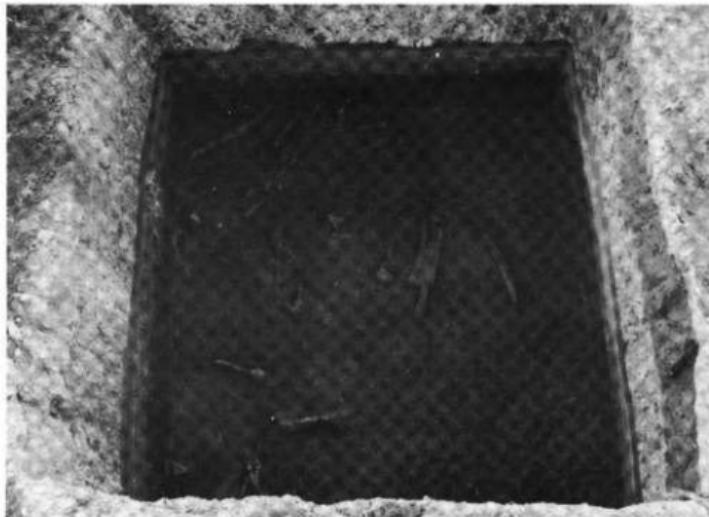
同 上



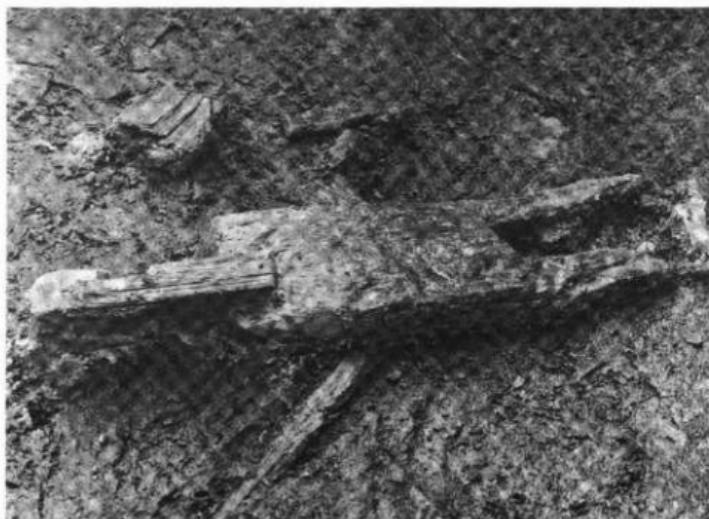
5 G 遺物出土狀況 (第1次面)



同上 土師器臺出土狀況



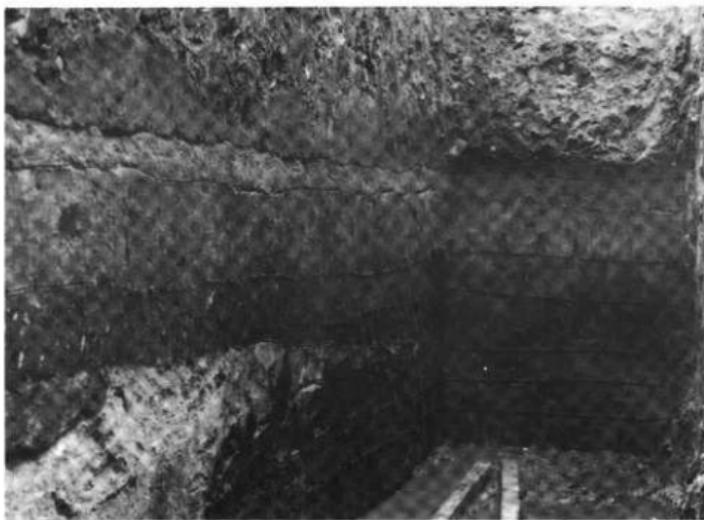
5 G 遺物出土狀況 (第2次面)



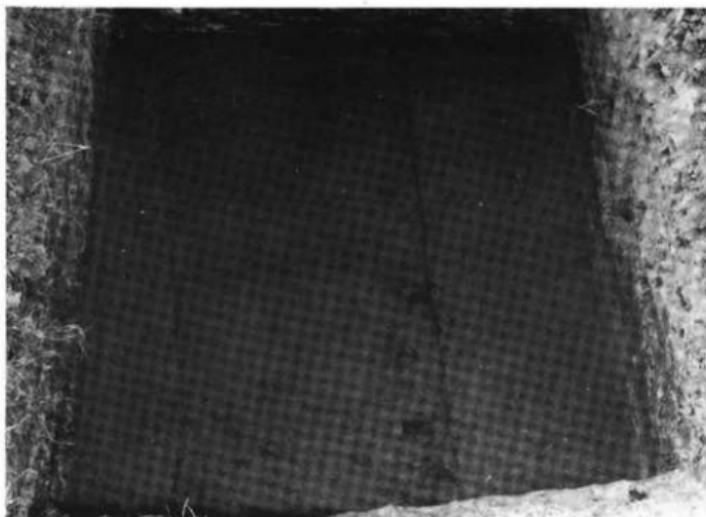
同上 建築用材出土狀況



第一トレンチ土層断面



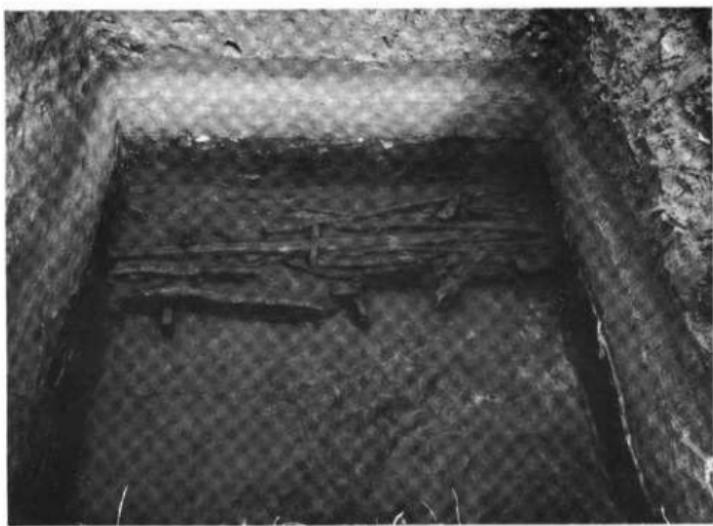
第二トレンチ土層断面



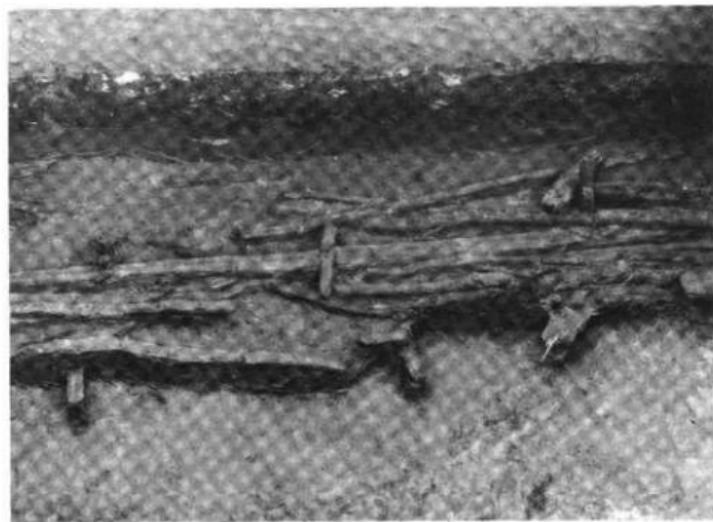
中世溝状遺構検出状況



奈良時代 木製品検出状況



還檢出狀況



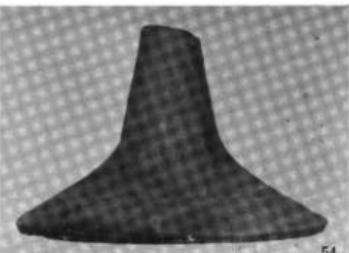
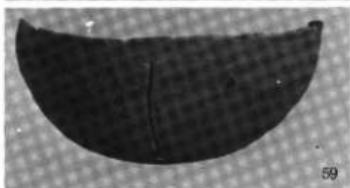
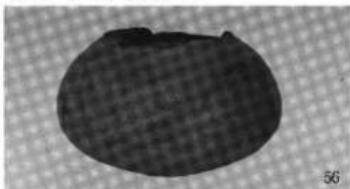
同上



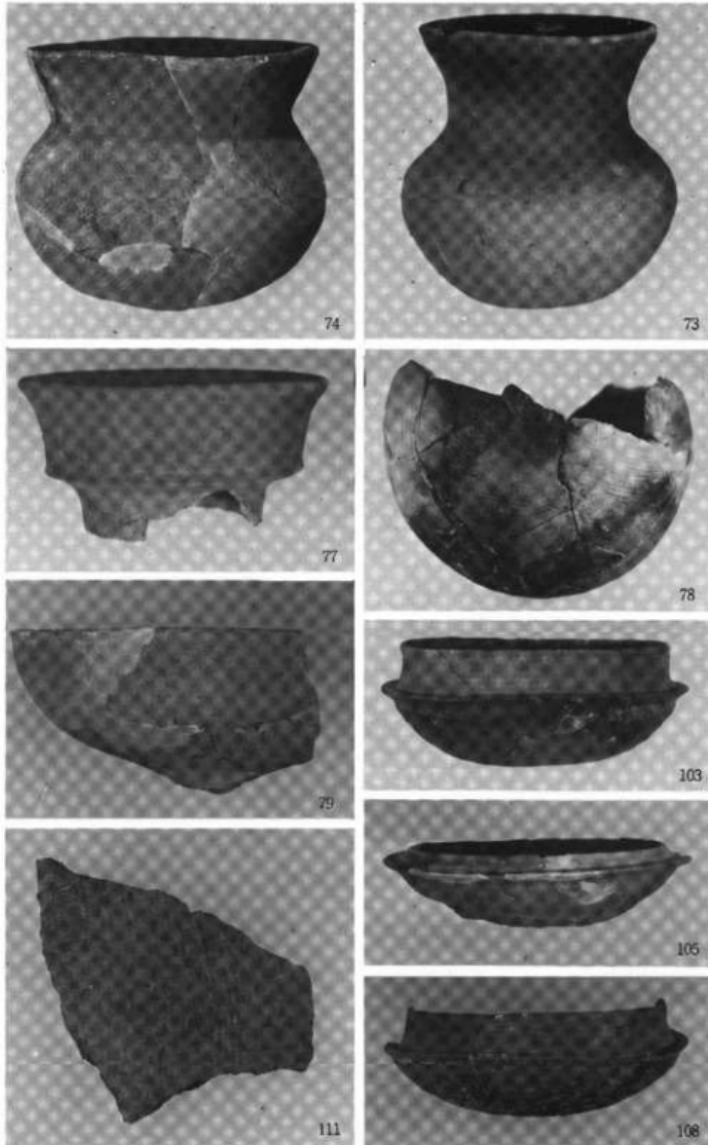
堰細部 中央の杭は中世に打込まれたもの



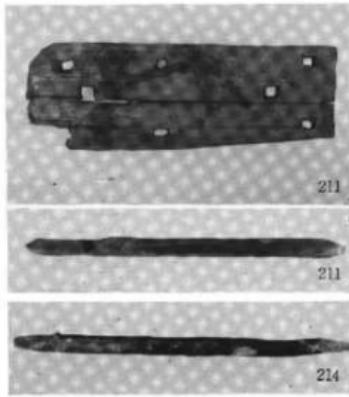
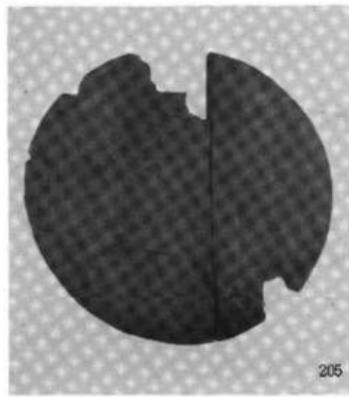
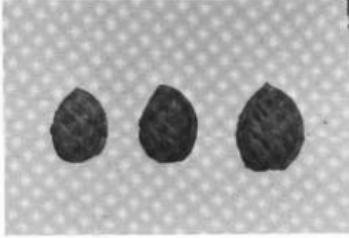
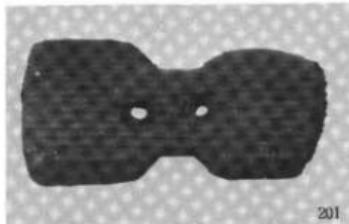
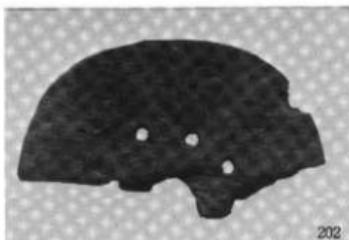
堰細部 横桟と杭の状況



図版第二
出土
遺物



図版第三出
土・遺
物



垂水南遺跡発掘調査概報

昭和52年3月31日

編集・発行 吹田市教育委員会
大阪府吹田市泉町1丁目3番40号